

『バーブル・ナーマ』の研究（Ⅲ）

A. S. ベヴァリッジとハイダラーバード写本

間 野 英 二

15世紀の中央アジアに、ティムール朝の王子として生まれ、後、インドのムガル朝の創設者となったザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル *Zahīr al-Dīn Muḥammad Bābur* (1483—1530) がチャガタイ・トルコ語で著した回想録『バーブル・ナーマ』*Bābur-nāma* が、トルコ散文学史上、最高の傑作のひとつに数えられる事¹⁾については、いまここで改めて贅言する必要も無いであろう。バーブルの、簡潔にして的確無比の文体は、バーブルが生きた15—16世紀の中央アジア・アフガニスタン・インドの政治・経済・社会・地理・文化の諸相を生き生きと描写して余すところが無い。また、作品の随所に、思いがけない程の率直さを以て吐露された折にふれてのバーブルの心境は、読む者を、バーブルの人間味あふれた精神の世界へと誘なう。

このような傑作であってみれば、古来、多くの人びとの関心が、この作品に向けられてきたのは当然である。そして、16世紀以降現代に至るインド・中央アジア・アフガニスタン・イラン・トルコ、さらに英・仏・露などヨーロッパの諸地域で、時代時代に、この作品に向けられてきた人びとの関心の所在、すなわちこの作品の研究史、を正確に把握する事は、この作品の総体的な理解のための不可欠の条件のひとつであると考えられる。

事実、これまでに、ソ連のブラゴワやアズィムジャーノヴァらによって、²⁾『バーブル・ナーマ』の研究史を叙述する試みが為されてきた。しかし、これ

1) 『バーブル・ナーマ』に対する評価については、例えば、В. В. Бартольд, “Иран, Исторический обзор,” *Академик В. В. Бартольд. Сочинения*, VII, Москва, 1971, стр. 305; A. Bombaci, *Histoire de la littérature turque*, tr. I. Melikoff, Paris, 1968, p. 135 を見よ。

2) Г. Ф. Благова, “К истории изучения «Бабур-наме» в России”, *Тюркологический сборник к шестидесятилетию Андрея Николаевича Кононова*, Москва, 1966, стр. 168-176 はロシアにおける研究史を記述し、С. А. Азимджанова, *Государство Бабура в Кабуле и в Индии*, Москва, 1977 の第1章(стр. 5-14)はムガル朝治下のインド、近現代のロシア、イギリス、パキスタンにおける研究について述べている。ただし、フランス、トルコにおける研究に

らの試みも、叙述されるべき研究史全体からすれば、わずかにその一部を覆うにすぎず、『バーブル・ナーマ』研究史の全貌は、なお解明されるべき課題として残されている。

本稿もまた、この残された課題のごく一部を解明しようとするものである。具体的には、研究史の中に最も大きな足跡を残した今世紀初頭のイギリスの研究者アンネット・スザンナ・ベヴァリッジの業績と、1905年に彼女によって出版されたハイダラーバード写本を用いて行われた英・トルコ・ロシア・ウズベク・仏の各国語への翻訳、それに1961年に出されたソ連のブラゴワによるベヴァリッジ説の批判、の内容をやや詳細に紹介し、折にふれ、それらの業績・学説に対する筆者のコメントを添える事によって、研究史上に残るこれらの諸業績に対する筆者の評価・立場を明白にしておこうとするものである。

筆者は先に、本紀要の第22号・第23号（1983・1984）に、『バーブル・ナーマ』の「フェルガーナ章」および「カーブル章」の全訳を発表したが、本稿が、本来それらに付せられるべきであった「解題」の一部として利用されれば幸である。なお、筆者の「『バーブル・ナーマ』の研究」には、「ヒンドゥースターン章」の邦訳をはじめ、なお欠けるところが多い。それら未完の部分については、さらに別の機会を得て発表したいと考えている。

I アンネット・スザンナ・ベヴァリッジの 『バーブル・ナーマ』研究

大英帝国の、インド勤務の文官（I. C. S.）で、ムガル朝時代インド史の研究者でもあったヘンリー・ベヴァリッジ Henry Beveridge³⁾ の夫人アンネット・

については全く言及していない。なおブラゴワの論文は、山田信夫氏所蔵本をコピーして利用したものである。記して謝意を表する。

- 3) ヘンリー・ベヴァリッジは, *Abū al-Faḍl, Akbar-nāma*, English translation by H. Beveridge, 3 vols., Bibliotheca Indica, 1897-1939 (reprint, New Delhi, 1973); *The Tūzūk-i-Jahāngīrī or Memoirs of Jahāngīr*, Translated by A. Rogers, Edited by H. Beveridge, 2 vols., London, 1909-1914 (reprint, New Delhi, 1978) など, ムガル朝期ペルシア語史料の研究者として名高いが、『バーブル・ナーマ』に関連する多くの短い論文をも発表している。その内の主なものは以下の如くである。①“The Meaning of the Word *nihilam*,” *JRAS*, 1900, pp. 137-138. ②“The Etymology of the Name *Bābar*,” *JRAS*, 1900, p. 546. ③“The *Bābarnāma* Fragments,” *Asiatic Quarterly Review*, 1910, p. 2. ④“A Passage in the Turki Text of the *Bābarnāmah*,” *JASB*, 1910, pp. 221-226. ⑤“An Obscure Passage in *Bābar’s* Memoirs,” *JRAS*, 1910, pp. 882-883. ⑥“A Dubious Passage in the Ilminsky Edition of the *Bāburnāma*,” *JASB*, 1911, pp. 5-7. //

スザンナ・ベヴェリッジ Annette Susannah Beveridge は、1900年の『王立アジア協会誌』*Journal of the Royal Asiatic Society* (略称 *JRAS*) の会員通信欄 (p. 143) に、1899年12月12日付の次のような書簡を寄せた。

拝啓 貴誌のページをかりて、Wāqī'āt-i-bābarī のトルコ語写本の存在についての情報を求めたく存じます。私が存じております3つの写本、つまり (1)大英博物館の断片写本、(2) India Office の良好な写本、(3) Kāsan⁴⁾ にあるイルミンスキー Ilminsky が用いた資料、以上の3本以外に関するどんな情報でも有難く存じます。 敬具

これが、20世紀の『バーブル・ナーマ』研究を代表する存在となるベヴェリッジ夫人が、『バーブル・ナーマ』に関する記事を学会誌に発表した最初であった。⁵⁾

この書簡からも明らかなように、ベヴェリッジ夫人は、すでに19世紀の末、Wāqī'āt-i-bābarī、すなわち『バーブル・ナーマ』の研究に着手していた。そして、この書簡からも知られるように、夫人の最大の関心は、当初から、『バーブル・ナーマ』の写本類へと向けられていた。

この書簡に続く夫人の論文は、

“Notes on the MSS. of the Turkī Text of Bābar's Memoirs,” *JRAS*, 1900, pp. 439-480.

であるが、この論文の中で夫人は、『バーブル・ナーマ』の写本として、バー

⑧“The Coinage of Husain Baikara,” *JRAS*, 1914, p. 142. ⑨“An Obscure Quatrain in Bābur's Memoirs,” *JRAS*, 1917, pp. 830-834 ⑩“A Letter from the Emperor Bābur to his Son Kāmran,” *JASB*, 1919, pp. 329-334.

4) ベヴェリッジ夫人が Kāsan と記すのは、ヴォルガ河畔の都市カザン Kazan の事である。

5) *JRAS* に付された会員名簿によれば、ヘンリー・ベヴェリッジは1893年以来の *RAS* のメンバーであるが、ベヴェリッジ夫人は、この書簡が書かれた1899年にそのメンバーとなっている。

6) 『バーブル・ナーマ』には、次の如き多くの呼称がある。①バーブルがその著書の中で用いている呼称: *Waqā'i* (『出来事』), *Ta'rikh* (『史書』)。この *Waqā'i* という呼称は、バーブルのいとこミールザー・ハイダルによっても、その著書『ターリーヒ・ラシーディー』の中で用いられているから、おそらくこれが本来の呼称であったと思われる。②バーブルの娘グル・バダン・ベギムがその著『フマーユーン・ナーマ』の中で用いている呼称: *Wāqī'a-nāma* (『出来事の記録』)。③アブル・フェズルが『アクバル・ナーマ』の中で用いている呼称: *Wāqī'āt-i Bāburī* (『バーブルの出来事』)。④ケール本 (イルミンスキー本)、ハイダラーバード本で用いられている呼称: *Bābur-nāma* (『バーブルの記録』)。⑤若干のペルシア語訳本に付せられている呼称: *Tūzuk-i Bāburī* (『バーブルの制度』)。現在では、普通、チャガタイ・トルコ語の原本を指す場合に *Bābur-nāma* が用いられ、そのペルシア語訳本を指す場合に *Wāqī'āt-i Bāburī* が用いられている。

7) ベヴェリッジ夫人は、この論文をはじめとして、その諸論文の中でバーブルを Bābar と記していたが、1914年発表の論文以降、特に理由を述べる事なく、これを Bābur に改めている。アラノ

ブルの自筆本をはじめとする以下の15種類の写本の存在を推定し、それぞれの特徴と思われる諸事項を記述した。I. Bābar 自筆本, II. Khwāja Kilān⁸⁾ 所蔵本, III. Humāyūn 所蔵本, IV. Elphinstone 購入本, V. 大英博物館所蔵本, VI. India Office 所蔵本, VII. ベンガル・アジア協会所蔵本, VIII. Mysore (Tīpū Sultān 図書館) 本, IX. Bibliotheca Lindesiana (Lord Crawford 購入) 本, X. ハイダラーバード本, XI. セント・ペテルブルク大学図書館所蔵本, XII. セント・ペテルブルク外務省所蔵本 (Kehr 本), XIII. セント・ペテルブルク・アジア博物館所蔵本 (Senkovskī 本), XIV. ブハーラー本, XV. ナザル・バイ・トゥルケスターニー本。

この内、当時ベヴァリッジ夫人が実際に、直接に手にして検討しえた写本は、V, VI, VII, IXの4写本であった。しかし、これらの4写本は、いずれもすぐれた写本ではなかったため、その存在が推定されるのみのI, II, IIIは別にして、夫人が最も深い関心をよせ、その直接の検討を希望していたのは、ライデン=アースカイン Leyden-Erskine⁹⁾ による英訳本の参考資料としても利用されたIVと、この論文発表時に近い1900年2月、夫のヘンリー・ベヴァリッジが、インドのハイダラーバードで実見したというが、なおその詳しい情報が到着していなかったX、それにロシア帝国内に存在していると思われたXI~XV、中でもイルミンスキー本¹⁰⁾ (図版参照) の底本にして利用されたXII (Kehr 本) とセンコフスキーの指示によって作成されたXIIIであった。この内、IVは、この論文の執筆時にはその所在が不明であり、後述する如く、のち1907年刊のベヴァリッジ夫人の論文の中でその発見が報ぜられるものである。またXI~XVのロシア領内の諸写本については、夫人は、写本目録やイルミンスキー本

ㄨ ㄨ文字のBABRをどう読むべきかという問題については、Mavlavi 'Abdu'l Wali, "The Spelling of Bābar's Name," *JASB*, 1918, pp. 453-455 があり、そこには、詩の脚韻の仕方を根拠に、Bābar, Bābur 両方の読み方が許されると述べられている。また現代ウズベク語では、ボービル Бобирと発音される。このボービルは、ペルシア語 [ā] はウズベク語では [ō] と発音されるため、むしろ19世紀の研究者たちによって用いられた Bāber に近く、従って現在のところ、Bābar, Bāber, Bābur のいずれが正しい読み方かはなお決定しかねる。筆者は、便宜的に、この内のバーブルを用いる事にする。なおこの語がペルシア語 babr (「虎」「ライオン」「豹」などの訳が辞書に見える) に起源を持つ外来語である事については H. Beveridge, "The Etymology of the Name Bābar," *JRAS*, 1900, p. 547 参照。

8) 正しくは Khwāja Kalān。ベヴァリッジ夫人も1905年の論文以降、Kalān と改めている。
 9) *Memoirs of Zehir-ed-Din Muhammed Baber, Emperor of Hindustan, Written by Himself, in Jaghatai Turki, and Translated, Partly by the Late John Leyden, Esq. M. D., Partly by William Erskine, Esq., With Notes and a Geographical and Historical Introduction*, London, 1826.
 10) *Baber-nameh, diagataice ad fidem codicis Petropolitani*, edidit N. Ilminski, Kazan, 1857.

نیکری تعالیٰ نینک عنایتی بیلان و حضرت آن سرور کائنات نینک شفاعتی بیلان
و چہار بار باصفا لاری نینک ہمتی بیرلان سہ شنبہ کونی رمضان آیینی پیشی دا
تاریخ سیکیز یوز توقسان توقوزدا فرغانہ ولایتی دا اون ایکی یاشته پادشاہ بولدوم
فرغانہ ولایتی بیشینچی اقلیم دین دور معہون نینک کنان سیدا واقع بولو بتور شرقی
کاشغر غربی سیرقند جنوبی بدخشان نینک سرحدی تاغلار شمالی دا اگرچہ
بورون شہرلار بارایکاندور مثل المالیق و المانوو یانکی کیم کتب لاردا طرار کنت
بیتیرلار مغول واوزبک جہتہ دین بوتاریخ دا بوزولوب تور اصلا معہون قالمابدور
مختصر ولایت تور اشلیق و میوہ سی فراوان کرد اگر دی تاغ واقع بولوب تور
غربی طرفیدا کیم سیرقند و خجند بولغای تاغ بوقتور اشبو جانب تین اوزکا
ہیج جانب تین قیش یاغی کیلا الماس سبحون دریاسی کیم خجند سویی غہ مشہوردور
شرق و شمالی طرفیدین کیلیب بو ولایت نینک ایچی بیلہ اوتوب غرب ساری
افار خجند نینک شمالی فناکت نینک جنوبی طرفیدین کیم حالا شاہرخبہ غہ
مشہوردور اوتوب ینہ شمال غہ میل قیلیب ترکستان ساری بارور ترکستان دین
خیلی قوی راق بودریا تمام قوم غہ سینکار ہیج دریاغہ قانیلماس یتی پان قصبہ سی
بار بیشی سبحون سوی نینک جنوبی طرفی دا ایکی شمالی جانبی دا جنوبی طرفی داغی
قصبہ لاری بیری اند جان دور کیم وسط تہ واقع بولو بتور فرغانہ ولایتی نینک پای
تختی دور اشلیقی وافر میوہ سی فراوان قانون واوزومی بخش بولور قانون
معلیدا فالیز باشیدا قانون سانمات رسم بولماس اندجان نینک ناشباتی سیدین
بخشی راق ناشباتی بولماس ماورا النہردا سیرقند و کیش قورغاندین سونکرا

موندین

イルミンスキー 本 p.2

の序文の英文抄訳，それにセント・ペテルブルクのアジア博物館館長であった
C. Salemann から与えられた情報をもとに記述している。

この論文は，ベヴァリッジ夫人の長年にわたる『バーブル・ナーマ』研究の
出発点となった論考として，いわば記念碑的な意味をも所有する論文であるが，

最も注目すべき点は、この論文の中で、夫人がイルミンスキー本に対する抜き難い不信感を表明している点である。すなわち夫人は、イルミンスキー本に付せられたイルミンスキーのロシア語による序文を自らは読みえなかったため、他者に、この序文の英語への抄訳を依頼し、この抄訳を通じて、イルミンスキーが出版に当って採用した基本方針を理解しようとした。ところが、この英文抄訳が不完全なものであった事も手伝って、夫人は、イルミンスキーがもともと『バーブル・ナーマ』のすぐれた正確なテキストを出版しようとする意図を持たず、ただ、このテキストを、チャガタイ・トルコ語を学習しようとする者のための教科書として編纂しようとしたものにしかすぎない——つまり、イルミンスキーはもともとテキストの出版に当ってさほど **serious** ではなかった——と理解した。後述する如く、現在では、このベヴァリッジ夫人の理解が誤解であり、イルミンスキーが、当時として最も信頼できるテキストを提供しようとしていた事は明白となっている。しかし、その研究の出発点においてベヴァリッジ夫人をとらえたイルミンスキー本に対するこの先入感・不信感は、以後の夫人の諸研究を規制していったという意味において、きわめて重要な意味を持つように思われる。

つづいて1902年、夫人は、バーブルの娘グル・バダン・ベギム Gul-Badan Begim がペルシア語で著した『フマーユーン・ナーマ』 *Humāyūn-nāma* のテキストと英訳を王立アジア協会から出版した後、さらにつづけて、

“Further Notes on the MSS. of the Turkī Text of Bābar’s Memoirs,”
JRAS, 1902, pp. 653-59.

を発表した。この論文では、まず、なお行方不明のIV. Elphinstone 購入本が、諸種の証拠から考えて、ライデン＝アースカインの英訳本のために利用された他、1586年におけるミールギー・パーヤンダ・ムハンマド Mīrzā Pāyanda Muḥammad とムハンマド・クリー Muḥammad Qulī によるペルシア語訳本、1590年におけるアブドゥル・ラヒーム・ミールザー ‘Abd al-Rahīm Mīrzā によるペルシア語訳本の作成に当って、それらの翻訳の底本としても用いられたであろう事を推定している。

ついで、自ら精査する事の可能となったX. ハイデラーバード写本（図版参照）について、写本の形態・内容を手短かに紹介し、これがイギリス・インドに存在する事の明らかな『バーブル・ナーマ』諸写本の中で「最初の完全なト

بسم الله الرحمن الرحيم

رمضان ایسی تارخ سیکرے یوز تو قسان تو قوز دا فرغانہ ولایتی
اون ایکی پاشته بادشاه بولدوم فرغانہ ولایتی بشتنجی اقمیم
دین دور معمره نینگ کنارسی واقع بولوبتور شرقی کاشغر غری
سمرقند جنوبی بدخشان نینگ سرحدی غلاری و شمالیدا اگرچه بور
شهرلار بار ایکنده ورشل المایغ داهاتو دیکنکی کیم کتب د اطرار ستر
مغول داور بک جبتی دین بوتارنج دابوز و بوتور اصلا معمره قالماید
مختصر ولایت تور شایغ و میورسی خوادان کردا کردی تارخ واقع بولور
غربی طرفی داکیم سمرقند و خجند بولغای تارخ بوتور ارشور جانبین
ارزکا هیچ جانب تین قیش یاعی کیدا اما سیمون دریاسی کیم خجند

مشهر

ハイダラーバード本 fol. 1b

ルコ語のテキスト」であり，セント・ペテルブルクの諸写本にたとえ勝らぬと
仮定しても，少なくともそれらに匹敵するテキストである事，そしてファクス
ィミールによって出版する価値が十分にあるテキストである事を明言している。
この論文は，現在に至るまで、『バーブル・ナーマ』の最良のテキストとして
利用され続けているハイダラーバード本の価値を，はじめて学界に紹介した論
考として，きわめて注目すべきものであった。

ついで夫人は，1904年には、『ドイツ東洋学会誌』*Zeitschrift der Deutschen
Morgenländischen Gesellschaft* に，

“Anfrage [nach dem Verbleib eines verlorenen MS des Bābarnāma],”

を英文で載せ、行方不明のエルフィンストーン購入本の行方についての情報を求めている。

翌1905年、夫人は“E. J. W. Gibb Memorial” Series の第1巻として、
The Bábar-nāma, being the Autobiography of the Emperor Bábar, the Founder of the Moghul Dynasty in India, written in Chaghatáy Turkish; Now reproduced in Facsimile from a manuscript belonging to the late Sir Sálár Jang of Haydarábád, and edited with a Preface and Indexes,
Leyden & London, 1905

を公刊した。書名に見られるごとく、ハイダラーバード写本を、実物通りに複製して学界に提供したものであり、以下に述べる如く、『バーブル・ナーマ』研究史上、まさに画期的な出版であった。

ついで夫人は、1905年と1906年に、

“The Haydarábád Codex of the Bábar-nāma or Wāqī‘āt-i-bābarī of Ṣahīru-d-dīn Muhammad Bábar, Barlās Turk,” *JRAS*, 1905, pp. 741-762; *JRAS*, 1906, pp. 79-93

を発表した。この論文は、先に出版したハイダラーバード写本の写真複製本に付せられるべき‘formal preface’として書かれたものであり、この写本の内容を詳しく検討して、その写本としての価値を確定しようとしたものであった。この論文の中で、夫人は、この書物の名称として、*Wāqī‘āt-i-bābarī*, *Wāqī‘¹¹⁾*, *Wāqī‘a-nāma*, *Bābar-nāma*, *Tūzūk-i-bābarī* の5種があり、ハイダラーバード本では、第1葉裏に *Bābar-nāma* と記されている事を紹介した後、ハイダラーバード本の内容にふれて、①バーブルの記述が、写本に見える5カ所の *lacuna*（後述注35参照）のため、中断している事、②記述のスタイルの上から、1519年1月3日（925年ムハッラム月1日）を境に、大きく2つの部分に分けられ、前半部がよく推敲された叙述体であるのに対し、後半部が日記体である事を指摘している。

ついで5カ所の *lacuna* を、その重要度の順に列挙して、それらの箇所が何故 *lacuna* となっているかについて、自らの解釈を述べている。この問題に関

11) 正しくは *Waqā‘i‘* である。

する夫人の解釈の中で、最も重要な点は、これらの *lacuna* が、バーブル自身によって、自らに都合の悪い箇所——例えばバーブルとサファヴィー朝のシャー・イスマーイールとの関係を記した箇所——が、故意に破棄された結果生じたものであるとする R. S. Poole らの説をしりぞけている点である。この解釈は、現在でも、ソ連の研究者 C. A. アズィムジャーノヴァによっても支持されているように、従うべきすぐれた解釈であると考えられる。¹²⁾

次に前述の1900年の論文 (“Notes on the MSS. of the Turkī Text of Bābar’s Memoirs,”) で取り上げられた『バーブル・ナーマ』の15種の写本の内、もともと存在しなかったIII. Humāyūn 所蔵本、それにもともとマイソールにあったが、現在はベンガル・アジア協会に所蔵されている VIII. Mysore 本を除外した13種の写本をリストにして示し、それぞれの写本の特徴を簡単に記述した後、4代にわたって Sālār Jang の一族によって所有されてきたハイダラーバード写本が、従来知られている諸写本の中で最も葉数が多く (382葉)、その点のみでもその複写本を出版する価値がある他に、この写本が、バーブル自筆本から直接に写された貴重な写本である可能性もある事を述べている。

そして最後に、『バーブル・ナーマ』のトルコ語テキストを用いたシャイフ・ザイン Shaykh Zayn, ミールザー・パーヤンダ・ムハンマド, アブドゥル・ラヒーム・ミールザーによるペルシア語訳, ライデン=アースカインの英訳, イルミンスキーのテキスト出版, パヴェ・ド・クルティユ Pavet de Courteille の¹³⁾仏訳, トイフェル Teufel¹⁴⁾ の論文などの諸研究を簡単に紹介している。この論文は、ハイダラーバード本の内容、特にその持つ *lacuna* について詳しく考察した点に最大の特徴が認められる。

ベヴェリッジ夫人は、つづいて1907年に、

“Further Notes on the Bābar-nāma MSS. : The Elphinstone Codex,”
JRAS, 1907, pp. 131-144

を発表し、従来その行方が不明であったエルフィンストーン本がスコットランドのエディンバークの Advocates’ Library で発見された事を報告した。この

12) C. A. Азимджанова, *Государство Бабур в Кабуле и в Индии*, Москва, 1977, стр. 14.

13) *Memoires de Baber (Zahir-ed-Din-Mohammed)*, Tome 1-2, Tr. pour la première fois sur le texte djagataï par A. Pavet de Courteille, Paris, 1871.

14) F. Teufel, “Bābur und Abū’l-faẓl,” *ZDMG*, 37, 1883, SS. 141-187.

写本は、ボンベイ知事であったエルフィンストーン Mountstuart Elphinstone が1809年、カーブルへの出張の際ペシャワルで購入し、他の4巻の写本と共に Advocates' Library に寄贈していたものであり、先にライデンおよびアースカインによって、その英訳本作成のために利用された重要な写本であった。ベヴァリッジ夫人は、前述の1900年の論文の発表に先立って、この写本について Advocates' Library に問い合わせの手紙を送っていたが、その際には、「そのような写本が所蔵されていたという記録は無い」という答を得て、以後、その行方を探索していたものであった。しかし、実は先の Library の調査が不十分で、実際にはこの写本がこの Library に所蔵されている事が新たに判明したものである。この論文の中で、夫人は、この写本精査の結論として、この写本が、バーブルの自筆本ではないが、16世紀の中葉（1556—1567頃）に作成されたと思われるきわめて優秀な写本で、写本中に、フマーユーンの手になる2つの注の写しと、ペルシア語による注が多く付せられている点に特に注目している。

ついで、翌1908年には、

“The Bābar-nāma. The Material Now Available for a Definite Text of the Book,” *JRAS*, 1908, pp. 73-98

を発表し、まずハイダラーバード本とエルフィンストーン本を比較して、言葉づかい・字句の面では両者はほとんど同一であるが、両者の関係は、どちらかが、どちらかの写本の写しであるという可能性よりも、両本共に、バーブル自筆本からの直接の写しである可能性が強い。そしてもしそうであれば、この両本は『バーブル・ナーマ』の ‘definite text’ 作成のための最良の基盤として利用できるはずのものであると述べている。

次に、先の1900年の論文では、間接的な情報に基づいて記述する他はなかったセント・ペテルブルク外務省本（Kehr 本）を、直接に調査する事ができた事を報告し、この調査の結論として、Kehr 本の内容と性格を次の如く述べている。

まず Kehr 本は、①Bābar-nāma、②Fragment、③ティムール朝君主伝、④ケールによる諸種の文献（Bābar-nāma をも含む）のラテン語訳、の4種類の部分から成るが、この内の①②の部分がイルミンスキーによって利用され、彼が出版した活字本（イルミンスキー本）の中に収録されている。しかしこの

内の②Fragment は、すでにトイフェルが指摘したように、ペルシア語で書かれた Abū al-Faḍl, *Akbar-nāma* に見えるバーブル関係の記事のトルコ語への翻訳などから成り、本来の『バーブル・ナーマ』には含まれていなかった部分である。

他方、①は2つの部分から成る。(1)908 H. (イルミンスキー本 p. 144 l. 5) までの部分。真正の『バーブル・ナーマ』のテキストとは言葉づかいが異なり、この部分は、アブドゥル・ラヒームのペルシア語版から、チャガタイ語に re-translate されたものである。(2)908 H. から935 H. に至る部分。この部分は真正の『バーブル・ナーマ』のテキストであり、『バーブル・ナーマ』の校訂テキスト作成に当たっても参考すべきものである。

ベヴァリッジ夫人は、908 H. までの部分がアブドゥル・ラヒームのペルシア語版からの re-translation である事を示す実例として、907 H. に関わる1パラグラフをとり上げ、ハイダラーバード本、ケール本、アブドゥル・ラヒームのペルシア語訳本の各テキストを次の如く提示している（夫人の論文ではテキストを提示するのにアラブ文字が使用されているが、ここでは、印刷の都合上、テキストをローマナイズして示す）。

A. ハイダラーバード本 97葉下から2行目から。

Dikhkettä ekändä Dikhket-ning gird wä nawāḥīsı-daghı taghlarnı hamışhā yayaq yürüp sayr qılur edim. akthar yalang ayaq yürür edim. yalang ayaq köp yürügändin ayaqlar andaq bolup edi kim tagh wä tash tafāwut qılmas edi. ushul sayr ithnāsıda bir kün¹⁵⁾ namāz-i digar bilä namāz-i shām arasında bir inchkä nāmushakhkhaş yol bilä bir uy tüşhüp bara dur edi. men dedim kim bu yol qayangha barur ekän. uygha köz salıng.¹⁶⁾ uynı itürmäng, tā yolning qay-sarı chıqarı ma'lüm bolghay. Khwāja Asad Allah¹⁷⁾ zārāfatı qıldı. dedi kim gāw kün shawad, chekār konım.

B. ケール本 264ページから。イルミンスキー本 119ページ1行目から。¹⁸⁾ ushal künlär Dikhkettä ekänimda hamışhā piyāda sayr qılur edim. köpchi

15) ベヴァリッジは GWN (gün) と印刷しているが、原テキストに基づいて KWN (kün) と写す。
16) ベヴァリッジは GWZ (göz) と印刷しているが、原テキストに基づいて KWZ (köz) と写す。
17) ベヴァリッジは GWN [GM] としているが、GWN を原テキストによって KWN と読む。
18) ベヴァリッジは GWNLAR (günlär) と印刷しているが、イルミンスキー本によって KWNLAR (künlär) と読む。

yalang ayagh yürür edim. köp ayagh yalang yürügändin ayaghlarım andagh bolup edi kim tagh wä tash ta'athîr qılmas edi. ushal waqıtta bir kün¹⁹⁾ namâz-i digar bilân namâz-i shâm arası bir inchkâ yol bilâ bir kishi bir öküz alıp bara dur edi. men sordum ke bu yol qayda barur. ayıttı kim öküzgâ qaralang. deyü turmang, tâ qayda barghay. bu sözni eshitip Khwāja Asad Allah zarāfat qıldı. dedi kim agar öküz yatsa ne qılır.

C. アブドゥル・ラヒームのペルシア語訳本 (India Office, No. 217) 63葉から。

dar ān ayām ke dar Diḥket būdam dar kūhhā-yi gird wä nawhā-yi Diḥket hamîshe pīyāda sayr mīkardam. akthar pāy barahnāi mīgashtam. az jihat-i pāy barahna gashtan bisyār pāyhāi ānchenān shode būd ke kūh wä sang tafāwut nemīkard. dar ithnā-yi hamīn sayr, yak ruzī, mīyān-i namāz-i shām wä namāz-i digar, dar yak rāh-i bārīk bā shakhshī gāwī mīraft. man goftam ke īn rāh kojā mīrafte bāshad. goft begāw nāzar andāzīd wä gom makonīd tā bekodām taraf bar āmadan rāh ma'lūm shawad. Khwāja Asad Allah zarāfatī kard wä goft ke gāw gom shawad che kār konīm.

参考までに、この部分の、筆者によるハイダラーバード本に基づく邦訳を記すと以下の如くである。

私はディフケトに滞在中に、ディフケト周辺の山々をいつも徒歩で見てまわっていた。ほとんど裸足で歩いていた。裸足でよく歩いたので、足は山も石も区別せぬ程になっていた。そのような散策の際、ある日、午後の礼拝と夕刻の礼拝の間の時刻に、1本の狭いどこへ通ずるのかはっきりしない道を、1頭の牛が下手へと進んでいた。私は「この道はどこへ行くのだろうか？牛によく眼をこらせ。道がどこへ通じているのかがわかるまで、牛を見失うな」と云った。ホージャ・アサドゥッラーが冗談に「もし牛が寝たら、どうしましょう」と〔ペルシャ語で〕云った。

さて、ベヴァリッジ夫人は、ケール本がペルシア語本からの重訳である事を

19) ベヴァリッジは GWN (gün) と印刷しているが、イルミンスキー本によって KWN (kūn) と読む。

示す証拠として、次の諸点をあげる。

1. ケール本（以下 K とする）の *ushal künlär* は、ペルシア語本（以下 P とする）の *dar ān ayām* の翻訳である。これに当る語はハイダラーバード本（以下 H とする）には見当らぬ。

2. K の *pīyāda* は P からとられたもので、H では *yayaq* というトルコ語が用いられている。

3. K の *ushal waqıtta* は、H の *ushul sayr ithnāsıda* より、P の *dar ithnā-yi hamīn sayr* により近い。

4. K の *arası* は P の *mīyān* の訳で、H の *arasıda* とは異なる。

5. H の *bir inchkā nā-mushakhkhaş yol* 「1本の狭い、どこへ通ずるのかははっきりしない (*nā-mushakhkhaş*) 道」が、本来、バーブルの書いた文章であったと考えられるが、P の写字生がこれを誤って *dar yak rāh-i bārik bā shakhşī* 「1本の狭い道を、1人の人物 (*shakhş*) と共に」と改悪したため、K もこれに基づいて *bir inchkā yol bilā bir kishi [bir öküz alıp]* 「1本の狭い道を、1人の人物 (*kishi*) が〔1頭の牛をつれて〕」とした。もともとバーブルの原文に存在せず、P にのみ見える「人物」という語が K にも見える事は、K が P からの重訳である事を示す最も明瞭な証拠である。

6. P の *man goftam ke* の 'ke' が、K でも *men sordum ke* としてそのまま用いられている。'ke' はトルコ語であれば 'kim' となるはずである。

7. ホージャ・アサドゥッラーの冗談は、H に見える如くペルシア語で云われたはずであるが、P では、この、わざわざペルシア語が用いられた部分が他の部分——本来トルコ語で書かれていたが、それからペルシア語に訳出された部分——と言語面で区別されていないため、K はこの部分をも、他の部分と同様に、トルコ語に翻訳してしまっている。

8. K には次の如き、バーブルが一般に使用していない用語・綴字・冗長な文章が見られる：*ekānimdā*; *köpchi*; *yalan*；を表わすのに YALANG ではなく YLNG という綴字を使用；*ayagh*; *köp*; *ta'thīr*; *dedim* の代りに *sordum* と記す；P に新たに書き加えられた *goft* を K はそのまま *ayıttı* と訳出；*deyü turmang*; *qayda*; *bu sözni eshitip* (冗長である)；*qaralang*。

ベヴァリッジ夫人は、以上の諸点を列挙した後に、参考のため、(1)パーヤンダ・ムハンマドのペルシア語訳、(2)ライデン＝アースカインの英訳、(3)パヴェ

・ド・クルティユの仏訳、(4)ケールのラテン語訳の、先の引用文に該当する箇所を引用し、最後に、1900年の論文で言及された15種の写本の特徴を改めて表示している。そして結論として、『バーブル・ナーマ』の校訂テキストの作成のためには、①最も完全なハイダラーバード本、②価値は①と同等であるが多くのページを欠くエルフィンストーン本、③大英博物館本（断片）、④ケール本の1部分、が利用できる事を述べ、なおこの他にブハーラー本をも調査する必要があると指摘している。

この論文は、イルミンスキーによる刊本の基礎とされたケール写本の1部分が、ペルシア語訳本からのトルコ語への重訳であるという、きわめて大胆な仮説を提示したものであり、以後の『バーブル・ナーマ』研究に量り知れない程の大きな影響を及ぼした画期的な論文となった。というのは、ベヴェリッジ夫人は、この論文の中でも、イルミンスキーの刊本が、ケール本を忠実に再現していないという、イルミンスキーの編集方針に対する不信感を表明しているが（p. 77）、それに加えて、もともとケール本そのものも、上述の如き欠陥を持っていたとすれば、それを不忠実に再現したイルミンスキー本がほとんど無価値の存在となる事は必然であるからである。事実、この論文は学界で高い評価を受け、以後、『バーブル・ナーマ』研究の根本史料としてイルミンスキー本を全面的に利用する者は、久しく絶える事になった。

しかし、現在の研究水準から見て、このベヴェリッジ夫人の結論がはたして正しいものであるか否かは、改めて検討し直さなければならない。現に、この時より50年以上を経過した1961年、ロシアのブラゴワ Г. ф. Благова^{補注)}は、このベヴェリッジ説と真向から対立する内容をもりこんだ論文を発表し、イルミンスキー本の復権を主張している。筆者は、現在のところ、このブラゴワの説に加担する者であるが、ブラゴワの説については後に詳しく紹介する事として、ここではベヴェリッジ夫人の画期的な学説を紹介するに止める。

つづいて夫人は、

“The Bābar-nāma: Dr. Kehr's Latin Version and a New Letter by Bābar,”
JRAS, 1908, pp. 828-831

を発表し、彼女が直接に調査する機会を得たケール本中の「ラテン語訳」の部分の内容を紹介している。すなわち、ケールのラテン語訳の部分は、ケールによる908 H. までの『バーブル・ナーマ』のラテン語訳の他、『バーブル・ナー

マ』とは直接には関係を持たぬ、バーブルの王子カムラーン Kamrān あての手紙のラテン語訳等が含まれている事を述べている。

つづいて、1909年には、

“Notes on the Bābar-nāma,” *JRAS*, 1909, pp. 452-460

を発表した。この論文で夫人は、1810年に発表されたクラプロート H. J. Klaproth による『バーブル・ナーマ』の研究論文²⁰⁾を紹介し、クラプロートが論文執筆に当って利用した写本がおそらくケール写本であったであろうと推定し、クラプロートの論文に記されている諸事項から、現在のケール本からは欠けている、本来のケール本の扉と巻頭の白ページに記されていたはずの文言を復原できるとしている。すなわち夫人は、もともとケール本の扉には、‘Naṣīḥat-nāma-yi Turkī-yi Ḥaẓrat-i Bābar Pādshāh Ghāzī Tāba Sirra-hu’ (「バーバル・パードシャー・ガーズィー陛下——神がその秘密を許されん事を——のトルコ語の忠告の書」) と記されていたはずであり、白ページには、‘bu waqā’i-ni dū shanba kūni jumādā al-awwalning ikidā senā 975 sīmūtū-da Hūjī Tash degān manzil-dā Muḥammad biz-gā tuḥfa keltürdi’ (「この『出来事』を、957年ジュマードーウル・アッヴェアル月2日月曜日〔1550年5月19日〕、スィムートゥ (?) で、ホージャ・タシュという宿駅地で、ムハンマドが私たちに贈った」) と記されていたはずであるとする。

なお夫人は、この白ページの記述について、先の1908年の論文 (“The Bābar-nāma: Dr. Kehr’s Latin Version”) では、この部分に関するケールのラテン語訳に基づいて、1つの解釈を提示していた。すなわち、夫人によれば、この記述は、フマーユーン配下の有力者ハージー・ムハンマド・キョケルトシュ Hājī Muḥammad kökältash が、1550年5月19日に、フマーユーンに『バーブル・ナーマ』を献呈した事を示す重要な記述であるというものである。

しかしこの解釈は、チャガタイ語にさほど通曉してはいなかったケールによる、チャガタイ語からの不十分なラテン語訳に基づいて出された解釈であり、いま従う事はできないと筆者は考える。このトルコ語の記述から云える事は、この写本が、1550年5月19日に、さる土地で、ムハンマドという者によって、ある人（これがフマーユーンである事を示す証拠は何も無い）に献ぜられた

20) Julius von Klaproth, *Archiv für asiatische Literatur, Geschichte und Sprachkunde*, I, St. Petersburg, 1810.

という事実のみであろう。夫人が、今回の論文（1909年）の中で、先の論文（1908年）のこの解釈を撤回していないのはいささか不可解に思われる。なお、この論文では、次に ‘Tāshkend’ という語の語源が論じられているが、これは『バーブル・ナーマ』への注釈用に書かれたものと考えられる。

夫人はつづく1910年の、

“The Bābar-nāma Description of Farghana,” *JRAS*, 1910, pp. 111-128
で、はじめて、ハイダラーバード本に基づく自らの英文訳注を発表した。この論文は、ハイダラーバード本の1b ~5b のフェルガーナに関する地理的概観の部分英訳し、それに詳しい注を付したものであるが、1912年以降に公刊され始める夫人による『バーブル・ナーマ』全訳の先がけをなした論文として特に注目される。そして、この論文に付せられたその詳細にして厳密な注は、夫人の研究者としてのすぐれた資質の一面を最もよく物語るものといえるであろう。

つづいて1911年、夫人は、

“The Bābar-nāma. A Passage judged spurious in the Haydarabad Manuscript,” *JRAS*, 1911, pp. 65-74

を発表し、ハイダラーバード本の1部に、後代の付加物である「偽」(spurious)の部分がまぎれこんでいるという推論を展開している。もっとも、この見解は夫人の創見というわけではない。夫人も述べているように、この論文はその前年（1910年）、夫君のヘンリー・ベヴェリッジが発表した

“A Passage in the Turki Text of the Bābarnāmah,” *JASB*, 1910, pp. 221-226

の中で述べた見解を補足強化しようとしたものである。問題の箇所は、ハイダラーバード本の118b, l. 2 にはじまり、およそ1.5葉（3ページ）続いて、「フェルガーナ章」の末尾（120a, l. 3）に至る部分であり、内容的には、1502年から1503年にかけての冬、アフマド・タンバル ²¹⁾ Aḥmad Tanbal の軍勢にアフシを追われたバーブルが、フェルガーナの山中を彷徨した末、遂には死を覚悟したが、からくも、自らの部下たちによって救出される場面が描写されている箇所である。この内容から、ベヴェリッジ夫人は、この部分を ‘Rescue

21) 『バーブル・ナーマ』の本文には、この状況がいつの状況であるかは明記されていない。ここでは、‘The flight therefore must have been in nearly the middle of 908, viz., December 1502 or January 1503’ とするヘンリー・ベヴェリッジの説 (*JASB*, 1910, p. 226) に従って、1502年から1503年にかけての冬と見ておく。

Passage' と名づけている。

参考のために、まずこの部分の、ハイダラーバード本に基づく筆者の邦訳を掲げる。

「汝，100年，否たとえ1日のみ留まったにせよ，

この心楽しき宮殿をいずれにせよ去らねばならぬ。

私は死ぬ事に心を決めた。その庭園には1本の流れが入って来ていた。私は身を清めた。2回の礼拝を行なった。頭を下げて祈願していると，私の眼がねむりについた。私はホージャ・ヤフヤー Khwāja Yahyā の息子で，ホージャ・ウバイドゥッラー Khwāja ‘Ubayd Allah 貌下の孫に当るホージャ・ヤークーブ Khwāja Ya‘qūb が，白黒まだらの (ablaq) 馬に乗った多くの人々と共に，私の前に白黒まだらの馬に乗って来られるのを見ていた。ホージャは「心配なさるな。ホージャ・アフラール Khwāja Aḥrār [=ホージャ・ウバイドゥッラー] が私をあなたの所へ遣わされた。彼は，“私たちはあの方 [=バーブル] のために援助の願いを聞きとどけ，君主の座におつけするのだ。どこであれ何か難しい事が生じたら私たちの事を心の中で念ぜよ。私たちはそこに行くだろう” と云われた。今，この時に，勝利はあなたの側にあります。頭を上げなさい。起きなさい」と云われた。

私がその時，気持よくなって眼覚めると，ユースフ・ダルガ Yūsuf darugha と彼の同行者たちが1カ所で「彼は口実をもうけてだますだろう。捕えてしばっておかねばならぬ」と相談していた。私はこの言葉を聞くと「お前たちはこんな風に話しているが，お前たちの内の誰が私のそばに近づけるか，さあ見てやろう」と云った。私がこう云っていると，庭園の壁の外側に大勢の騎馬の者が来る物音が聞こえてきた。(119a) ユースフ・ダルガが「もし私たちがあなたを捕えてタンバル Tanbal のもとへ連れて行っていたなら，私たちの大手柄になっていたものを。彼は今また，大勢の者たちを派遣した。あなたを捕えるためです」と云った。彼はこの物音がタンバルが派遣した者たちの馬のひずめの音であると確信していた。

この言葉を聞くと，私の不安は増大して，私はなすすべを知らなかった。この時，この騎馬の者たちは庭園の門を見つけようとせず，古くなっていた所から壁をつき破って入ってきた。見ると，私の，命をささげてくれた家来であるクトゥルク・ムハンマド・バルラース Qutluq Muḥammad Barlās とバーバー

イエ・パルガリー Babā-yi Pargharī が、10名15名あるいは20名であったろうか、到着したのであった。彼らは近づくと馬から下りて、遠くから膝まづき、敬意を表して、私の足もとにひれ伏した。その時私には、あたかも神が新たな源から命をお与え下さった様に感じられた。私は「そのユースフ・ダルガとこの立っているおろかな傭兵たちを捕えてしばれ」と云った。その小者たちは急に逃げ出したが、あちこちで1人ずつ1人ずつと捕えられ、しばられて連れて来られた。

私は「お前たちは何処から来たのか？ どうして分ったのか？」とたずねた。クトゥルク・ムハンマド・バルラスが「アフシを脱出した際、あなたと別れて落ちて行った時、私はアンディジャーンにまいりました。その時ハーンたちもアンディジャーンに来ておられました。私は夢をみました。ホージャ・ウバイドゥッラーが、“バーブル皇帝はカルナーン Karnān (119b) という村にいる。行って、彼を連れておいで。王位は彼のものとなっているのだから”と云われました。私はこの夢を見て気分がよくなりました。大ハーンと小ハーンに〔この夢の事を〕申し上げました。私はハーンたちに“私には5～6人の弟や息子がいます。さらに数人の若党をお加え下さい。カルナーン方面を通って行って情報を得るつもりです”と云った。ハーンたちは“私たちも彼がその道の方へ行つたろうと思う”と云って、10人の者を任命された。そして“その方面に行ってよく調べて情報を得よ。とにかくはっきりと情報をつかめ”と云われました。私たちがこの会話を交していた時、バーバーイエ・パルガリーが“私も行って探します”と云いました。彼も2人の若党と弟と共に、一緒になって、私たちは乗馬しました。道を進んで今日で3日です。アッラーのおかげであなたを見つける事ができました」と云った。彼らは色々と話した。そして「進んで下さい！ 乗馬して下さい！ このしばった者たちをも連れて行って下さい！ ここに留まる事はよくありません。タンバルはあなたがここに来ているという情報を得ております。何としてでも行ってハーンらに合流されるよう！」と云った。

そこで、私たちは乗馬してアンディジャーン方面に向け急ぎ進んだ。私たちは2日間何も食べていなかった。夕の礼拝時に、皆は1頭の羊を見つけて来て1カ所で下馬し、殺して焼肉 (kebāb) にした。私はその焼肉を満足するまで食べた。その後乗馬して、5日行程の道のりを2昼夜急行して進みアンディ

ャーンに入り、おじの大ハーン、小ハーンに会い、過ぎ去った日々の事を全て話した。私はハーンらと4カ月間一緒にいた。色々の所へ(120a)行って私を探していた私の家来たちが集まって来た。300人以上の者たちがいた。私はふと、「いったいつまでフェルガーナ地方にあてもなく留まっていなければならないのだろう。諸方面に別の機会を見つけよう」と考え、[910年]ムハッラム月[1504年6/7月]、フェルガーナ地方からホラーサーンをめざして出発した。」

さてこの部分は、ハイダラーバード本、ケール本、そしてこれに基づいたイルミンスキー本(pp. 144-146)に見えるものの、エルフィンストーン本、ペルシア語訳本には欠除している。その結果、この部分は、イルミンスキー本に基づくパヴェ・ド・クルティユの仏訳(i, p. 255)には訳出されているものの、エルフィンストーン本を参照したライデン＝アースカインの英訳(p. 122)には訳出されていない。アースカインは、この部分は、バーブルが、劇的効果をあげる目的でバーブルの運命についての読者の好奇心をあおり、読者の心に不安感をいだかせたままにしておくため、自から故意に破棄したものであろうと推測している(p. 123)。

さて、ベヴァリッジ夫人は、まずこの部分が、各写本(エルフィンストーン本、ハイダラーバード本、2種のペルシア語訳本、ケール本)にどのように現れているかを、テキストを引用して示し、ついでこの部分全体の英訳を掲げ、さらに、イルミンスキーとパヴェ・ド・クルティユがこの部分の信憑性に全く疑いをさしはさまなかった理由を、彼らが用いたテキストそのもの(つまりケール本とイルミンスキー本)が、ペルシア語からトルコ語への重訳であり、バーブルの真の文体や語彙を伝えたものではなかったため、彼らは、この部分の文体や語彙の奇妙さに気づく事ができなかったのであると説明している。

次に夫人は、この部分を「偽」と考える理由を、夫君のヘンリー・ベヴァリッジの論点をも継承しつつ、次の如く列挙している。

1. この部分が2種のペルシア語訳に欠けている。
2. 2つの夢は、信用するには、あまりに状況に適合しすぎており、またあまりに奇蹟的にすぎる。
3. ホージャ・ヤフヤーにヤークーブという名の息子があった事は、他の史料では知られていない。

4. 救出者とされる者たちの名が、『バーブル・ナーマ』の他の箇所には見えない。

5. ハーンらはアンディジャーンにいなかった。

6. バーブルはアンディジャーンに向かわず、カンド・バーダー²²⁾ムにいたハーンらのもとへ行った。

7. バーブルは、ハーンらと4カ月を過ごした後ホラーサーンに向かったのではなく、ハーンらの死後、しかもスーフ、フシュヤール地方に約1年間を過ごした後、ホラーサーンに向かった。

8. バーブルのまわりに集まったのは「300人以下200人以上」であり、「300人以上」ではなかった。

9. 「3日」、「1日と2晩」、「5日」で踏破されたという道のりは、約70マイルであった。

10. この部分は、約18カ月の重要な出来事を覆うにはあまりに短く、不十分である。

11. ホージャ・アフラールの約束は、少なくともこの時点(908A. H.)におけるバーブルの望みという限りでは、実現されなかった。またヤークーブの約束は、バーブルがこの勝利の直後に再び敗北して亡命生活を送ったことから考えれば、実現されたとはいえぬ。この部分は、バーブルのヒンドゥースターン征服後に、その征服の事実を知っている注釈者が造り出したものである。

さて、以上がベヴェリッジ夫人の見解であるが、これに対する筆者の見解を述べると以下の如くである。なお、1. 2. といった数字は、以上の夫人の見解に付した数字に対応するものである。

1. この部分がペルシア語版に欠けているからといって、バーブル自筆本にも欠けていたとはいえない。単に、ペルシア語版が作成された際、翻訳者が底本として利用したトルコ語本に、すでにこの部分が欠けていた事を示すものにしすぎない。現に、ベヴェリッジ夫人がバーブル自筆本に最も近いと考えるハイダラーバード本には、この部分が含まれている。また、ケール本にこの部分が含まれている事実は、仮に夫人の仮説——ケール本の908年までの部分が、ペルシア語訳本から作成されたトルコ語への重訳であるとする仮説——を正し

22) 正しくは、カンディ・バーダーム（「アーモンドの町」）である。

いと仮定すると、少なくともこの部分は、現存する2種類のペルシア語本とは異った別の1つのペルシア語訳本（つまり、ケール本作成の基礎とされた訳本）には含まれていた事になる。そして、もしそうであるとする、その別の1つのペルシア語訳本が作成された際、その基礎として利用されたトルコ語本には、この部分が含まれていた事になる。つまり、もともとこの部分はトルコ語原本に含まれていたという事になり、この部分が偽であるとする夫人の説とは明らかに矛盾する。

2. バーブルは、多くのティムール朝の王子たちと同様、ナクシュバンディー²³⁾教団の支持者であったから、当時、教団のシャイフたちが持つと一般に信じられていた予言・奇蹟の能力²⁴⁾を、彼もまた信じていたとしても、少しも不思議ではない。また危機に際して、バーブルが、これらシャイフたちが持つと信じられた不可思議な能力にすがりたいという心理状態にあったとしても不合理ではない。この部分は、バーブルのそのような心理状態が、バーブルの頭の中に描き出させた幻覚を、バーブルが夢という形で表現したものとする事が可能である。なおホージャは906年にもバーブルの夢の中に登場している。

11. バーブルがやがて王位につくであろうというホージャ・アフラルの予言は、王位につきたいという当時のバーブルの願望を反映したものにはすぎず、それがすぐに実現しなかったとしても、その事はさほど問題ではない。またホージャ・ヤークーブの予言は、バーブルが危機を脱したという事実によって、確かに実現したものであるから、夫人の議論は不当である。

5. 6. これはヘンリー・ベヴェリッジの説を継承したものであるが、誤りである。彼は『バーブル・ナーマ』の記述によって、シャイバーニー・ハーンの来襲を警戒したハーンらがアンディジャーン包囲をとりてカンド・バーダーム〔正しくはカンディ・バーダーム〕に退却したと理解しているが、実際には、『バーブル・ナーマ』ハイダラーバード本 111a には、「ハーンらはホジャンド川を渡らず、マルギーナーン、カンディ・バーダームを経て退却し、ホジャンドで渡河した」とあり、カンディ・バーダームに留まらず、ホジャンドでシル川を渡って、川の北岸へと退却したと記されている。しかし、より重要なポイ

23) ナクシュバンディー教団に関する諸文献については、間野英二「トルキスタン」『アジア歴史研究入門』4, 1984, pp. 115-117 参照。

24) 例えば、Mawlānā Fakhr al-Dīn 'Alī b. Ḥusayn Wā'iz Kāshifi, *Rashahāt 'Ayn al-Ḥayāt*, ed. 'Alī Asghar Mu'iniyyān, II, Tehran, 2536/1977, pp. 521, 529-530, 537-539 参照。

ントは、これが、バーブルが危機におちいる前のハーンらの所在地を伝える記事にしかすぎず、危機を脱して以後のハーンらの所在地を伝えた記事ではないという点である。従って、危機を脱したバーブルが、この間に再びアンディジャーンにもどっていたと思われるハーンらに合流したと考えても、少しも不合理ではない。

3. 現在知られている諸史料に、その名が見えぬからといって、その実在性を否定する事はできない。

4. 『バーブル・ナーマ』の中に、1度しか記されていない人物は他にも多い（ベヴェリッジ英訳本の人名索引参照）。

8. 「300人以下200人以上」という数字は、のち1504年、バーブルと共に実際にホラーサーンに向かった者たちの数であり、それより以前にバーブルのもとに集まって来た者たちの数「300人以上」と異っていたとしても、何の問題もない。

9. おそらく夫人は「3日」ないし「5日」行程と記された約70マイルを「1日と2晩」(‘day and two nights’) で走破する事は不可能と考えたのであろうが、「1日と2晩」と訳出された語は、原文 (119b. l. 13) では ‘iki kechā wā kündüz’ で、²⁵⁾「2昼夜」と訳すのが正しい。2昼夜やすまずに急行すれば、約70マイルを走破する事も可能であると思われる。もっとも、この約70マイルという数字も、必ずしも正確なものではない。

これに対して、残る7. 10. の見解は正当なものといえる。たしかにこの部分（バーブルのアンディジャーン到着以降の部分）は、「約18カ月」間におこった諸事件を伝えるには異様なほど短く、またその記述も、7. に指摘された如き不明確さを含む。ここには、当然記されるはずの、シャイバーニー・ハーンによる、アフスィにおける両ハーンの捕獲と釈放といった重要事件も全く記載されていない。しかし、この異様さを、この部分が「偽」であるという事実結びつけようとするのは、いささか短絡的にすぎよう。筆者としては、この異様さを、単に、前掲訳文の、「4カ月間一緒にいた」と「色々の所へ」の間か、それとも「別の機会を見つけようと考え」と「ムハッラム月」の間かに入

25) Gunner Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964, p. 180 に, kiče kündüz, night and day と見える。

るべき約1カ年分²⁶⁾の記事が、何らかの理由によって現在知られている『バーブル・ナーマ』のテキストにはすべて欠除していると考え、事によって十分に説明できるように思われる。

以上述べたところがもし正しいとすれば、ベヴェリッジ夫妻が、‘Rescue Passage’を「偽」と考えた論拠は、いずれもくずれ去ったことになろう。

次にベヴェリッジ夫人は、バーブルの‘true text’とこの‘Rescue Passage’との間には、文体・語彙の上でも、熟達者と初心者との間にみられるほどの大きな相違が認められると主張する。

まず参考のために、この‘Rescue Passage’のテキストを、ハイダラーバード本（〔 〕内はイルミンスキー本によって補った部分）によって示す。なお、夫人が問題にした箇所をゴシック体で示す。

agar şad sāl [mānī] war yakī rūz

bebāyad raft azīn kākhi dilafrūz

özümni ölümgä qarār berdim. ushal bāghda bir su aqıp kelādur edi. wuḍū qıldım. iki rak‘at namāz oqudum. bashımnı munājātqa qoyıp tilāk tilāydur edim kim, **közüm uyqıgha barıptur. körādur men** kim, Khwāja Ya‘qūb, Khwāja Yahyāning oghlı, Ḥaḍrat-i Khwāja ‘Ubayd Allahning nabīraları, rūberüyımgha ablaq at minip köp jamā‘at **ablaq sawārlar bilān** keldilār. dedilār kim, gam yemāngiz. Khwāja Aḥrār meni sizgā yibārdilār. dedilār kim biz alargha isti‘ānat tegürüp, pādishāhlıq **sanadıgha** olturghuzur biz. har yerdā mushkul ish tüshsä bizni nazarıgha keltürüp yād etsün. biz anda ḥāḍir bolur biz. ḥālā ushbu sā‘at fath wä nuşrat sizning sarı dur. bash kötāring. uyghanıng.

ushal ḥalda khūshḥāl bolup uyghandım kim, Yūsuf darugha wä

26) 908年の冬（1502年12月～1503年1月頃か？）にバーブルが危地におち入り、その後ハーンらのもとに4カ月滞在し、さらにその後910年のムハッラム月（1504年6/7月）にフェルガーナ地方を離れてホラーサーンに向かったとすれば、1503年4/5月頃から、1504年6/7月頃までの、約1カ年間の記事が欠けている事になる。なお、この約1カ年間という数字は、バーブルの「ムハンマド・シャイバーニー・ハーンがスルターン・マフムード・ハーンとアラチャ・ハーンを破りタシュケンドとシャールヒーヤを取った際、私は山麓にあるこのスーフとフシュヤールの地方に来て約1年間艱難辛苦をなめた後、カーブルへ向け出立したのであった」（ハイダラーバード本 3b-4a）という記事と完全に一致するものである。ベヴェリッジ夫人の「約18カ月」という数字は、その中にバーブルがハーンらのもとに滞在したという「4カ月間」をも含んだ数字であるが、上述の如き解釈によって、従う事ができない。

hamrāhlari birbirigā maşlahat qiladurlar kim, bahāna qılıp ḥayal qiladur. tutup **baghlamaq** kerāk. bu sözni men eshitip dedim kim, sizlār bu yosunluq sözlār siz. ammā körāyim kim, qaysıngız mening qashımgha kelā alur. ushbu sözning üstidā edim kim, bāghnıng **dīwār**-ıdın tashqarı qalın atlıqning kelür āwāzı keldi. (119a) Yūsuf darugha dedi kim, agar sizni alıp Tanbal qashıgha barsak edi, bizning ishimiz ilghar barur edi. ḥālā yana köp kishi yibāriptur, sizni tutqalı. awwal yaqın qıldı kim, bu āwāz Tanbalning yibārgān kishilärining atını tawushı bolghay.

bu sözni eshitgäch manga idtirāb köpragh bolup, qılır ishimni bil-mādim. **ushal ḥaynda** bu atlıqlar bāghnıng eshigini tapargha fursat qılmay **dīwār**nı kim, eski bolghan yerdin rakhina qılıp kirdilār. körsām kim, Qutluq Muḥammad Barlās wā Bābāyi Pargharī kim, mening jān tartqan nökörlärim, on on besh yigirmä kishi bolghay, yetip keldilār. bular yawuq kelip **attin özlärni tashlap** yıraghdın yükünüp ta'zīm qılıp mening ayaghımgā yıqıldılar. **ushal** ḥālda manga andaқ ḥālat boldı kim, **gūyā** manga yāngi bashtın khudāy jān berdi. men dedim kim, ol Yūsuf darughanı wā bu turghan muzdūr mardaklarnı tutup **baghlang**. **ushal** mardaklar qacha berip edi kim, bir yerdā birāwni tutup baghlap keltürdilār.

men dedim kim, sizlār qaydın keläsiz, nechük khabar taptıngız. Qutluq Muḥammad Barlās ayıttı kim, Akhsīdin qachıp chıqqanda sizdin ayrıla tüşhkändā Andijān keldim kim khānlar ham Andijān kelipturlar. men tüşh kördüm kim Khwāja 'Ubayd Allah dedilār kim **Bābur Pādishāh Karnān** (119b) degān kenttä dur. barıp anı alıp keling kim, pādishāhlıq **sanadı** anga ta'alluq boluptur. men bu tüşhni körüp khūshḥāl bolup ulugh khān kichik khāngha 'arḍ qıldım. khānlargha dedim kim mening besh altı ini oghlum bar. yana bir nechä yigit qoshungız. Karnān tarafı-dın barıp khabar alayın. khānlar dedilār kim, bizning khāṭirimizgha ham yetādur kim, **ushal** yolgha barghan bolghay. on kishi ta'īn qıldılar. dedilār kim, **ushal** sarı barıp khūb taḥqıq qılıp khabar alıng. barī kim,

zāhīran khabar tapqaysiz. ushul sözdä edük kim Bābāyi Pargharī dedi kim, men ham barıp istärmen. ol ham iki yigit inisi **bilän** ittifāq qılıp atlanduk. bu kün üç kün dur kim, yol keläbiz. al-ḥamd li-llāh sizni taptuk, dedilər. ayıttılar kim, yürüng atlanıng. bu **baghlaghanlarnı** ham alıp baralıng. munda turmagh yakhshı emästur. Tanbal sizni munda kelgän khabaringızni tapıptur. har ṭawr qılıp barıp khānlargha qoshulalıng.

ushal zamān atlanıp Andijān tarafıgha yürüy berdük. iki kün bolup erdi kim hich ṭa‘ām yemäydur edim. namāzi pishīn bolup edi kim qoynı tapıp kelip bir yerdä tüshüp olturup kebāb qıldılar. ushal kebābdın toyghuncha yedim. andın songra atlanıp besh künlük yolnı iki kechä wä kündüz ılghar qılıp kelip Andijāngha kirip ulugh khān dadamnı wä kichik khān dadamnı körünüş qıldım wä ötkän künläri tamām bayān qıldım. khānlar bilän tört ay birgä bulındı. har yerdä (120a) barghan körgän nökärlärim yıghıldılar. üç yüzdin köprük kishi bar edi. khātırımgha keldi kim, tā key bu Farghāna wilāyatıda sar-gardān bolup turmaq keräk, har tarafgha ṭalab qıla men dep muḥarram ayıda Farghāna wilāyatıdın Khorāsān ṭalabıgha atlanıp chıqdım.

さて、ベヴァリッジ夫人は、このテキストの次の諸点を、文体・語彙上の問題点として指摘する。

(a) ²⁷⁾ ushal bāghda bir su aqıp kelädur edi. 指示代名詞 ushal は、この ‘Rescue Passage’ の中に、この部分以外にも7度も使用されているが、この語は、バーブルが「稀」にしか使用していない語である。

また、(b) su aqıp kelädur edi も、バーブルでは su aqar という表現が普通である。

(c) ²⁸⁾ közü²⁸⁾m uyqıgha barıptur. バーブルは、同じ意味の事柄を、117b では közü²⁸⁾m uyqugha bardı と表現している。

(d) ²⁹⁾ körädur men 「lit. 私は見ている」は、83b では tüşh kördüm, tüşh

27) 夫人はこの bir を省略しているが、原テキストによって補う。

28) 夫人は gözü²⁸⁾m と読むが、外来語を除き、チャガタイ語の語頭に g- は現れぬが故に、誤りである。

29) 夫人は 83a とするが誤りである。

körär men という表現を用いている。

(e) ablaq sawārlar³⁰⁾ bilān. 「lit. まだらの騎馬の者たちと共に (with piebald horsemen)」 「まだら」 のというのは奇妙 (odd) である。またトルコ語の atlıq ないし atlıq kishi の代りにペルシア語の sawār が用いられ、さらにバーブル常用の bilā (「～と、～と共に」) の代りに bilān が用いられている。

(f) 2カ所に見える masnad 「この語を筆者は sanad と読んだ」 は、バーブル常用の takht と異なる。

(g) 時を表現するための hāl, hayn の使用は、バーブルの用語としては共に普通でない。

(h) hamrāhları birbirigā maşlahat qıladurlar では、写字生が hamrāhları を hamrāyları, birbirigā を birbirgā と誤記している他、動詞 qılmaq が動詞 bermāk の代りに用いられ、また「同行者」を意味する hamrāh は、バーブルの表現としては普通でない。彼はこのような場合には、普通、後置詞 bilā を利用して「誰々と誰々」と表現する。

(i) baghlamaq, baghlang, baghlaghanlar という表現における動詞 baghlamaq は、ここでは「捕える」の意味で用いられているが、この意味を表現するのに、バーブルは、普通、動詞 almaq ないし tutmaq を用いる。バーブルでは、baghlamaq は「何か（例えば天文台や詩集）を組み立てる、まとめる」の意味を表現するために用いられている。

(j) 「壁」を表現するのに、トルコ語 tam の代りにペルシア語 dīwār が用いられている。

(k) 119a. l. 6 (on on besh yigirmā kishi) は、「バーブルの10～20人に対して3倍の数（ベヴァリッジ夫人の表現をそのまま引用しておく：‘Fol. 119 l. 6, the triple number for Bābar’s 10-20’）」である。〔この夫人の指摘が何を意味するのか、筆者には残念ながら不明である〕。

また, gūyā が, lik の如き何らかの形の代りに用いられている。

(l) attın özlärni tashlap. 動詞 tashlamaq が「馬から下りる」意味で用いられているのは普通でない。この動詞は、『バーブル・ナーマ』の他の箇所 (94b, 95a) では「脱出する」の意味で用いられている。

30) 夫人は単に sawār とするが、原文によって改めた。

(m) バーブルの事を *pādishāh* と呼ぶのはアナクロニズムである。

(n) *zāhīran khabar* 「確実な情報」を表現するバーブルの用語は *haqīqa* である。

さて以上がベヴァリッジ夫人が指摘した文体・語彙上の問題点であるが、これらに対する筆者の見解を述べると以下の如くである。

(a) *ushal* 「まさにその」の使用がたとえ稀であっても、『バーブル・ナーマ』中の他の箇所にも使用例がある以上、それがここで何度も使用されている事には特に問題はないと思われる。

(b) *su aqīp kelādur edi* は「水が流れて来ていた」の意で、*su aqar* 「水が流れている」とはニュアンスが異なる。バーブルは、ニュアンスのちがいを、表現を変えてあらわそうとしたにすぎない。

(c) *közüm uyqıgha barıptur* は「私の眼はねむりにおちいていた」の意で、*közüm uyqıgha bardı* の「私の眼はねむりにおちいった」とはニュアンスが異なる。バーブルは、ニュアンスのちがいを、表現を変えてあらわそうとしたにすぎない。

(d) *körādur men* 「私はずっと〔夢を〕見ていた」と *tüsh kördüm* 「私は夢を見た」とはニュアンスが異なる。ただし、*tüsh körär men* 「私は夢を見ていた」とは、ほとんど同じニュアンスであるが、同様のニュアンスを表現するために2つの表現法が用いられていても、別に不思議ではない。

(e) *ablaq* は、夫人が考えた如く *sawār* を修飾する形容詞ではなく、「(白黒まだらの馬)」を意味する名詞である。従って、*ablaq sawārlar bilān* は「白黒まだらの馬に乗った人々と共に」の意味で、ベヴァリッジ夫人の訳「まだらの騎馬の者たちと共に」は誤訳である。*sawār* 及び(j)の *tam* については、バーブルがトルコ語の代りにペルシア語を使用している例は他にも知られている(後述54ページ参照)ので、特に問題にする必要はない。*bilā*, *bilān* は、おそらく写字生の慣用していた語が、*bilā* ではなく *bilān* であったため、ここでも、もともと *bilā* とあったものが、*bilān* と書き改められているにしかすぎないのではなかろうか。

(f)(g)(h)(i)(l)(n) バーブルが1つの概念をあらわすのに、常に1つのきまった用語しか使用しなかったと考える事はゆきすぎである。ある箇所である1つの用語が用いられていても、別の箇所では別の用語が用いられて、格別不思議で

はない。

(k) この問題点の前半部（「3倍の数」の部分）で、ベヴァリッジ夫人が何を問題にしているのか、筆者には理解できなかった。大方の示教をあおぎたい。また、後半部の *gūyā* 「云ってみれば、あたかも」も何故ここで問題にされなければならないのか理解に苦しむ。この場合、状況によく適した単語である。おそらくベヴァリッジ夫人は、これがペルシア語である事に抵抗を感じたのであろうが、『バーブル・ナーマ』でペルシア語がトルコ語の代りに用いられている場合も見られる事については後述（54ページ）参照。

(m) バーブルは、『バーブル・ナーマ』の冒頭で「899年ラマザン月、私はフェルガーナ地方で12歳で *pādishāh* となった」(1b) と記し、また自分の父のウマル・シャイフ・ミールザーについても「ウマル・シャイフ・ミールザーは高い望みと大いなる野望を持った *pādishāh* であったので、常に征服活動を志していた」(5b) と記しているように、*pādishāh* という用語を、はやくから単に「支配者」を意味する普通名詞として使用している。たしかに、バーブルが自らを「バーブル・パーディシャー」と呼ばせるようになったのは、『バーブル・ナーマ』の1507年から1508年にかけての冬の記述の中に、「この時まで、人びとはティムール・ベグの子孫らを、彼らがたとえ君主^{スルターン}であっても、ミールザーと呼んでいた。この機会に、私は私をパーディシャーと呼ぶように命じた」(215a) とあるように、この時より数年後の事である。しかしバーブル自身がこの用語を、前述の2例の如く、これ以前の時代に関する記述の中でも使用している以上、ベヴァリッジ夫人の如く、問題の文章の中にこの語が使用されているからといって、それを「アナクロニズム」というのは正当でない。

以上によって、筆者は、ベヴァリッジ夫人が問題にした文体・語彙上の諸点も、意味不明の(k)前半部をのぞき、特に問題にするには当たらないと考える。そして、もし以上の筆者の見解が正しいとすれば、ベヴァリッジ夫妻が「偽」と考えたこの ‘Rescue Passage’ は、「偽」ではなく、バーブル自身の筆によって書かれた ‘true text’ と考えられる事になろう。ただし、この部分には、ヘジラ暦909年/1503年6月26日—1504年6月13を中心とする約1カ年分の記事が欠如している。おそらくこの欠如が、最初ベヴァリッジ夫妻にこの部分の真憑性に対する疑いの念をひきおこしたものであろうが、記事の脱落——これは現存する『バーブル・ナーマ』では少くとも5カ所に見える——とテキストの

真偽性とは、直接には何の関連も持たないものである事は、特に改めて指摘する必要もないであろう。³¹⁾

ついでベヴェリッジ夫人は、1914年に、

“Notes on the Bābur-nāma,” *JRAS*, 1914, pp. 440-451

を発表し、『バーブル・ナーマ』に記載された2つの地名 (Nagarahār/Nīng-nahār; Dara-i-nūr) とダッライ・ヌール産の2種類のワイン、それに Bihbūd Beg に関連してバーブルの1511—1512年の第3次サマルカンド征服時における発行貨幣の問題について論じている。これらは、『バーブル・ナーマ』の本文に付せられるべき注として書かれたものと思われる。

次に夫人は、1922年、ハイダラーバード本を底本とする『バーブル・ナーマ』の英語への全訳を刊行したが、これについては次節(Ⅱ)で述べる。

さらに1923年には、

“Further Notes on Bāburiana. I. The Identity of the “Bukhārā Bābur-nāma” II. Paternal Counsels attributed to Bābur in a Bhopal MS.,” *JRAS*, 1923, pp. 75-82.

を発表した。そしてこれが、筆者の知る限り、夫人が『バーブル・ナーマ』について発表した最後の論文である。

さてまず I. The Identity では、イルミンスキーが依拠したケール本の内容を再び詳細に紹介し、ついでイルミンスキー本が、ケール本中の「バーブルのフェルガーナでの活動を伝えた部分」「バーブルのカーブルでの活動を伝えた部分」³²⁾『フマーユーン・ナーマ』中の、バーブルのヒンドゥスタン章の自筆本よりのコピーの部分」と、本来バーブル自身によって書かれた部分ではない「偽の」「編者の序（讃辞の部分）」「‘Rescue-passage’」「Hindal の養子縁組の部分」を1つに組み合わせ、これに『アクバル・ナーマ』から取られた‘Fragment’を末尾に加えて、全体として‘Turki reading-book’として役立つように編纂された編纂物であり、本来の『バーブル・ナーマ』とは似て非なるものである、という従来からの主張をくりかえしている。イルミンスキー本の性格に関する夫人のこの解釈に対するソ連のブラゴワ女史による批判と、それに

31) この‘Rescue Passage’をバーブルの真正なテキストと見なす考えは、Fernand Grenard, *Baber. First of the Moguls*, Translated and Adapted by Homer White and Richard Glaenzer, New York, 1930 (reprint 1970), pp. 243-245 にも見える。

32) 論文中の「6」を「7」の誤植と考え、このように解釈した。

ついでに筆者の見解については、後にIIIでふれる予定である。

II. Paternal は、Bhopal State Library に所蔵されるバーブルの作と伝えられるフマール・ヌーリの訓戒の文書（1葉の短いもの）の内容を、写真付きで詳しく紹介し、これがバーブルの作とは認め難い事を述べたものである。

Ⅱ ハイダラーバード本を利用した翻訳

さて以上が、アンネット・スザンナ・ベヴェリッジの『バーブル・ナーマ』研究（訳本はのぞく）の概要であるが、要するに、その研究は、『バーブル・ナーマ』の写本研究を中心として展開され、結論的には、従来『バーブル・ナーマ』研究の基礎として利用されて来たイルミンスキー本の価値をほぼ全面的に否定し、それに代るべきテキストとしてのハイダラーバード本の価値をきわめて高く評価したものといえるであろう。そして、このベヴェリッジ夫人の結論は、それ後も多くの研究者たちに支持されて、今日に至るまで、ほとんど学界における定説としての地位を保ち続けているという事ができる。事実、ベヴェリッジ夫人の諸研究の発表と夫人によるハイダラーバード写本の刊行以後、各国で出版された『バーブル・ナーマ』の諸国語への翻訳には、いずれもハイダラーバード本が底本の1つとして用いられ、イルミンスキー本は完全に脇役の立場へと後退したのである。以下本節では、これらの翻訳について紹介する。

さて、『バーブル・ナーマ』の諸国語への翻訳の内、ハイダラーバード写本に基づく最初の翻訳は、ベヴェリッジ夫人自身の手になる次の作品であった。

The Bābur-nāma in English (Memoirs of Bābur). Translated from the original Turki Text of Ṣāhiru'd-dīn Muḥammad Bābur Pādshāh Ghāzī by Annette Susannah Beveridge, 2 vols., London, 1922

この書は、ベヴェリッジ夫人がそれぞれ1912年、1914年、1917年、1921年に4分冊の形でロンドンで発表した英文訳注を、2巻の形にまとめたものである。その後、この書は1969年にロンドン、1970年にニュー・デリーで、いずれも1巻本として復刻された他、1975年にはラホールで2巻本の形でも復刻されている。なお筆者は、この内の1969年ロンドン復刻本を用いる。

さて本書は、目次、序文、訳注、附録、索引、補正の7部分から成る。序文（xxvii-1xi）では、文人バーブルを育くんだ環境、『バーブル・ナーマ』の書

名、構成、欠落部分と欠落の理由、諸写本の特徴と性格、ライデン＝アースカインの英訳本に対する夫人の見解が簡潔に述べられている。中でも、諸写本の特徴と性格を論じた部分は、先に長年にわたって『王立アジア協会誌』に発表した諸論文のまとめともいえるべき性格を持ち、夫人の見解が手短かに述べられていて便利である。いうまでもなく、ここでも、ハイダラーバード本、エルフィンスターン本の優良性とは対照的に、ケール本、イルミンスキー本は、学術的研究の基盤として利用する事のゆるされない編纂物であり、‘a very comedy of (blameless) errors and mischance’ であると論断されている。

次に本書の中心をなす「訳注」(1—716)の部分は、ハイダラーバード本とエルフィンスターン本を底本に、India Office Library 所蔵の2種のペルシア語訳本 (No. 215-217) をも参考にして、全文を英語に訳出し、訳文中の地名・人名などの固有名詞、さらに訳出に当たって問題のあった箇所を読み方等に関するきわめて詳細な脚注を付したものである。

訳文は、時に訳が欠けていたり、誤訳と思われる部分も見られるが、全体と

33) 例えば、英訳 p. 169 l. 14 ‘I was walking with some difficulty’ は、原典 108b ll. 8-9 ‘aṣā tutup tashwish bilā yūrūr edim’ の ‘aṣā tutup’ (「杖について」) が訳出されていない。p. 311 ll. 13-14 ‘For why? How otherwise should we have traversed those pathless slopes and sudden falls?’ は 195a l. 13-195b l. 1 ‘ne üchün kim (agar mundaq ulugh qar bolmasa) andaq bīrah uchma wā segirtmādin kim ötä alghay edi belki agar ulugh qar bolmasa awwalghı uchmada oq ilning at wā tāwāsi tamām qalghay edi’ の訳文としては、‘belki agar’ 以下 ‘qalghay edi’ に至る原典の1行分が訳出されていない。なおこの訳の欠けている部分は、「というより、もし大雪でなかったならば、第一に、険所の所で皆の馬やらくだは全て立往生したはずであった」と訳出できる。もっとも、このような訳文の欠落の内、後にベヴェリッジ夫人がそれと気づいた部分は、訳本巻末の ‘Omissions from translation and foot-notes’ に補訂がなされている。

34) 例えば、英訳 p. 167 l. 16 ‘I had not bared my sword’ は、原典 107b l. 2 を ‘yaldaghlamay dur edim’ と読んだ結果出された訳文であるが、正しくは ‘baldaghlamay dur edim’ と読み、「私は剣のつかにも手をかけられなかった」と訳すべきである。p. 180 l. 10 ‘You take those horses’ は、原典 117a l. 2 の ‘atlarnı alahing’ の訳としては主語が逆で、「〔私たちは〕彼らの馬をもらう事にしよう」と訳すべきである。p. 272 l. 33 ‘(Wali Beg) had been one of the Mirzā’s father’s (Mansur’s) great begs’ は原典 171b l. 6 ‘(Wali Beg) Nukuz dur Mirzāning uluq beg edi’ の Nukuz (部族名) を理解できなかった事を示すもので (英訳 p. 273 note 1 参照), 「(ワリー・ベグは) スクーズである。ミールザーの大ベグであった」と訳出すべきところである。p. 291 ll. 15-17 ‘he also played the guitar (ghichak) beautifully and added three strings to it’ は、182a ll. 3-4 ‘ghijjakni ham khūb chapur edi. ghijakkā bu üch qıl taqti’ の訳文であるが、ghichak は ghijjak が正しく、またこれを「ギター」と訳すのは、弓を用いて演奏するこの弦楽器の訳としては正確さに欠ける。p. 296 ll. 6-7 ‘he saw me at the foot of the valley when I came down off Sāf-hill’ は、184b ll. 11-12 ‘Kūh-i Sāfdin Darra-yi Bāygha tūshkandā meni kelip kōrdi’ の固有名詞 ‘Darra-yi Bāy’ (「バーイの谷」) を理解できず、これを ‘darra pāy’ と読んだための誤訳で、「私がサーフ山を出てバーイの谷に下馬した時、彼は来て私に会った」と訳出すべきところ。p. 296 l. 15 ‘in two or three months,’ p. 299 l. 35, ‘Three months,’ p. 305 l. 2 ‘40 days,’ p. 310 l. 21 ‘50 or 60,’ は、それぞれ原典の 185a l. 3 ‘bu bir ↗

してはきわめて正確で、現在に至るも、その利用価値は絶大である。ただし、訳者が「偽」と考えた ‘Rescue Passage’ と、同じく訳者がフマレーンの作又はバーブルによる後代の追加と考えた ‘Māhīm’s adoption of Hind-āl’ の部分は、訳文からは省かれ、附録の D と L の部分に、その省略の理由と共に訳文が示されている。

この英訳には、2つの特徴が認められる。第1の特徴は、訳文の中に、本来原文には無い小見出しが加えられている点である。例えば906年の記事には、a. ウズベク占領下のサマルカンド、b. バーブル、ケッシュを離れムーラ峠を越える、c. バーブル、サマルカンド攻撃を再開、d. バーブル、奇襲によってサマルカンドを占領、e. バーブルの第1子誕生、f. サマルカンドにおけるバーブル、g. バーブル、サリ・プルで敗北、h. バーブル、サマルカンドで包囲さる、i. タンバルのフェルガーナにおける活動という9つの小見出しが加えられ、本文の内容をただちに掌握できるよう配慮されている。この小見出しは、巻頭の目次にも収録されており、これを一覧する事によって『バーブル・ナーマ』の全容を容易に把握できる仕組になっている。まことに周到な配慮というべきである。

第2の特徴は、現存するテキストに見られる5カ所の記事の欠落部分³⁵⁾が、訳者の手になる ‘Translator’s Note’ と題する記述によって補われている点である。例えば、914年の記事の途中に始まり924年末に至る約10年間の本書最大の欠落部は、Khwāndamīr, *Habīb al-Siyar* や Mīrzā Ḥaydar, *Ta’rikh-i Rashīdī* 等の諸史料に見える記述を根拠にした、1年ごとの訳者による諸事件の叙述 (pp. 349-366) によって補われ、この間のバーブルの活動がいかなるものであったかを簡潔に知りうるよう配慮されている。この配慮は、欠落部に相当する時代におけるバーブルの活動を、欠落部前後の『バーブル・ナーマ』の

ay iki ayniing ichidā,’ 187b l. 3 ‘üch tört ay,’ 191a l. 2 ‘yigirmä kün,’ 194b l. 11 ‘qırq ellig’ の訳としては不正確で、「1～2カ月の間に」「3～4カ月」「20日」「40～50」と訳すべきである。p. 450 l. 20 ‘(We) rode to Karg-awī’ は、253b l. 6 ‘karg awigha atlanduk’ の ‘karg awī’ (「犀狩り」) を固有名詞ととったものであるが誤りで、「私たちは馬で犀狩りに出かけた」と訳すべきである。なお、ベヴァリッジ夫人が後に気づいた誤りは、訳本巻末の ‘Corrigenda’ の中で訂正されている。

35) これらの欠落部は次の如くである：①ヒジュラ暦909年を中心とする約1年間の記事、②914年の記事の途中から924年に至る約10年間の記事、③926年の記事の途中から932年に至る約5年10カ月の記事、④934年の記事の途中からこの年の末に至る約5カ月間の記事、⑤936年のはじめから937年のバーブルの死没に至る約1年4カ月間の記事。

記述に結びつけるためには不可欠のものであるが、他方、この配慮によって『バーブル・ナーマ』の翻訳の中に、『バーブル・ナーマ』の記述とは異ったいわば異質の記述が混入されるというマイナスの面も生じている点には注意する必要があるであろう。筆者としては、翻訳に当っては、欠落部はあくまで欠落部のままだに残し、その補完は、訳者による解題（ここには、当然バーブルの小伝も収められるはずである）の中で行われる方が、より理想的であると考えている。

訳文に付せられた脚注の部分は、当時訳者が利用する事のできた多彩な文献を利用して書かれた詳細なもので、今日に至るも、これを凌駕する注釈はなお存在していない。この注の特にすぐれている点は、読解上問題のある部分については、その部分のトルコ語原文を記し、その原文を何故に訳文の如く訳出するかについての根拠をも記している点である。この点は、ベヴェリッジ夫人の研究者としての誠実さと厳密さを最もよく示したものであり、本書の学術的価値をいやが上にも高めるものである。

次に「附録」では、脚注では扱い切れない、バーブル及び『バーブル・ナーマ』に関わる A より V に至る22項の諸問題が論じられている。参考のためにそれら22項の内容を摘記しておく、以下の如くである。A. Akhsī の位置と消滅, B. Qıl-quyırugh 鳥と Baghrı-qara 鳥, C. gosha-gır, D. 'Rescue Passage', E. Nagarahār と Ning-nahār, F. Dara-i-nūr という名称, G. 2種の Dara-i-nūr 産ワインの名称, H. 貨幣上に見える Bih-būd, I. 190b の 'weeping-willows' について, J. バーブルのカンダハールの建物, K. アフガン人の伝説, L. マーヒームによるヒンダルの子としての採用, M. bahrī qūṭās という語, N. 数種の鳥について, O. ヒンドゥスターンの植物についてのフマーユーンの注, P. バーブルの "Revenue List" (f. 292a), Q. "Rāmpūr Dīwān" について, R. Chandīrī と Gūālīār, S. 935AH の『バーブル・ナーマ』について, T. Lakhnau/Lakhnūr について, U. Oudh のバーブル寺院の刻文, V. カーブル及びその近郊のバーブルの庭園。これらの内の若干 (D, E, F, H) は、先に『王立アジア協会誌』に発表された考察を再録したものであり、また若干 (C, D, H, K, L) では、夫君ヘンリー・ベヴェリッジの考察が踏襲されている。この「附録」は、バーブル及び『バーブル・ナーマ』に関する小論文集的な性格を持ち、『バーブル・ナーマ』研究に当っては必ず参照

されるべき価値をなお保持している。

「索引」は、人名、地名、一般事項の3つの索引から成るが、いずれもきわめて詳細であり、索引作成に当ってモデルともすべき、すぐれた出来ばえのものである。最後の「補正」の部分には、訳注の中での、訂正・追加・削除すべき箇所が列挙されている。

本書に欠ける所があるとすれば、それはベヴェリッジ夫人自らも断っている如く、バーブルの活動の舞台としての、中央アジア、アフガニスタン、インドの地図を全く掲載していない点である。しかしこの欠陥も、この訳書の持つ上述の長所に比較すれば、ごく些細なものにしかすぎない。本書は、本書の冒頭に付せられた訳者による献辞——「この書をバーブルの名声を奉げる」——にふさわしく、バーブルの名声をますます高めかつ広める上で、きわめて大きな貢献をなしたといえるであろう。

ハイダラーバード本に基づく第2の翻訳は、トルコのアラトによる現代トルコ語訳である。

Gazi Zahirüddin Muhammad Babur, *Vekayi. Babur'un hâtıratı*, Cilt: I. II., Doğu türkçesinden çeviren Prof. Reşit Rahmeti Arat, Önsözü ve tarihî özeti yazan Y. Hikmet Bayur (Türk Tarih Kurumu Yayınlarından II. Seri-No. 5a, 5b), Ankara, 1943, 1946

書名からも明らかな如く、「序文」と「歴史的概観」の部分はバユル Yusuf Hikmet Bayur が執筆し、翻訳をアラト Reşit Rahmeti Arat が担当している。

「序文」(S. 05-021)では、バーブルの敘述の特徴(率直さと誠実さ)、書名、バーブルの国家がトルコ族の国家であったかモンゴル族(Mogol)の国家であったかの問題、サファヴィー朝がトルコ族の国家であったかイラン人の国家であったかの問題、テキストの欠落部(ヒジュラ暦908—909; 914—925; 926—932; 936—937の部分)、『バーブル・ナーマ』の構成(インド征服後に編まれた899—914年に至る叙述体の部分と925年以下の日記体の部分に分かれると述べる)について解説している。

つづく「歴史的概観」の部分(023—0138)は、諸史料に基づいてティムール歿後のティムール朝史(024—072)を概観した後、バーブルの生涯を、a) フェルガーナ、サマルカンド統治時代(899—909/1494—1504)、b) カーブル

を本拠にトルキスタンの再征服をめざした時代 (910—920/1504—1514), c) カールを本拠にインドに進出をはかった時代 (920—932/1514—1526), d) カール及び北部インド統治の時代 (932—937/1526—1530) の4つの時代に分け、各時代におけるバーブルの活動を比較的詳細に叙述している(072—0138)。

この概観の中で、『バーブル・ナーマ』の欠落部については、まず908—909年の部分——ベヴァリッジ夫人が‘Rescue Passage’として問題にした部分——に関連しては、①原典119bに記された、バーブルのアンディジャーンにおけるハーンらとの合流の記事と、110bにはじまるそれ以前の記事との間には、本来別の記事があったはずで、ここには明らかに記事の脱落が見られる。②ハーンらがアンディジャーンにいたのは909年である。従って、ここ(119b)では、908年の記事の1部と、909年の記事の1部とが誤って連結されている。③908年の記述の末尾(120a)に置かれている「色々の所へ行って私を探していた私の家来たちが集まって来た。300人以上の者たちがいた。私はふと、“いったいいつまでフェルガーナ地方にあてもなく留まっていなければならないのだろう。諸方面に別の機会を見つけよう”と考え、ムハッラム月、フェルガーナ地方からホラーサーンをめざして出発した」という記述は、後の910年の記述(120a)からも明らかな如く、908年ではなく、910年の状況を記したものである。④つまり、110b—120aには、908年の記事に、909年および910年の記事の一部が混入している。⑤ただし、909年に属するシャイバーニー・ハーンによる両ハーンの捕獲といった重要事件の記述は欠如している、と述べている(S. 084-087)。

このバユルの見解は、②の、ハーンらのアンディジャーン滞在を909年とする根拠が必ずしも明確でなく、ハーンらが、908年中に、いったん退去したアンディジャーンに再び帰っていた可能性をも否定する事ができないため、①②④に関してはなお疑問が残る。しかし、③は指摘通りであり、⑤の909年の重要事件の記事が全く欠けているという指摘も正しい。また、これらの問題点にもかかわらず、バユルが、全体としてこれらの記事を、ベヴァリッジ夫人の如く、「偽」とは全く考えていない点が注目される。

さてバユルは、この欠落部に関する見解をこのように述べた後、現存する『バーブル・ナーマ』には述べられていない909年を中心とするバーブルの活動を、*Ta'rikh-i Rashīdī* などの諸史料を用いて叙述している。このような、

欠落部の補完を、先のベヴェリッジ夫人の如く本文の中に組み込んで行かうか、それともバユルの如く「序文」などの別の箇所に置くべきかは見解の分かれる所であろう。しかし、筆者としては、バユルの方式を、本文はできる限り原テキストの姿をそのありのままに伝える方が望ましいという観点から、より好ましいものとする。なおバユルは、914—925, 926—932, 936—937年の欠落部についても、同様の補填を行っている。この処置は、『バーブル・ナーマ』の記述を正確に理解するのに資するところ多大である。

次に、アラトによる短い「序文」(S. 0139-0143)が付され、ここでは、簡単に『バーブル・ナーマ』の研究史が述べられている。

「翻訳」は、ハイダラーバード本を底本にして行われているが、訳文中には、ハイダラーバード本の葉数と共に、イルミンスキー本のページ数も付記されている。後に本稿Ⅲの部分でふれられる如きイルミンスキー本の価値を考えると、このアラトの処置は適切なものであったと考えられる。本書では、第1巻に「フェルガーナ章」の翻訳が収められ、第2巻に残る「カーブル章」「ヒンドゥスターン章」の翻訳が収められている。

訳文は、さすがにトルコ語を母国語とする訳者の手になるだけあって、バーブルの簡潔な文体を、きわめてよく再現している。なお、バーブルが『バーブル・ナーマ』の中にちりばめたチャガタイ・トルコ語、ペルシア語の詩は、訳文中にすべてアラブ文字を用いて原文のまま引用され、その下に現代トルコ語の翻訳が付されている。バーブルをはじめとする詩人たちの苦心の作にかかわる詩の持つ美しさは、翻訳のみでは再現する事ができないと考えられた結果であろう。

翻訳の次に、「附録」(S. 433-436)として、ハイダラーバード本には見えずイルミンスキー本(pp. 502-506)にのみ見えるいわゆる‘Fragment’の一部を訳出している。

つづく「索引」(S. 439-570)は、固有名詞の総合索引であるが、各名辞には「～の子」とか「～地方の地名」といった短い説明が加えられており利用に便利である。

つづく「注」(S. 573-669)は、『バーブル・ナーマ』中に見える術語や難解な単語・事項³⁶⁾をアルファベット順に配列して、それぞれについて用例をあげ、

36) 例えば, *begim*, *eşik ihtiyarı*, *içki*, *kökeltaş*, *tenke*, *uruk*, *yasal*, *yığaç*, *yığit* など。

説明を加えた1種のグローサリーである。各項目に関する用例の抽出は周到をきわめ、全体として「バーブル・ナーマ難解語辞典」的な性格を持つ。このグローサリーは、本訳書の学術的価値を最も高くしている部分である。

次に、『バーブル・ナーマ』に引用されている詩の作者別の索引が、トルコ語、ペルシア語の詩に分けて掲載(S. 671-672)され、最後に正誤表と目次が付されている。また第2巻の巻頭にはトプカプ・サライ博物館所蔵のバーブルの肖像画が掲げられ、同じく巻末には、「トルキスタン—ヒンディスタン図」という色ずりの地図1枚が付せられている。ただし、地図は収録された地名の数が少く、さほど利用価値の高いものではない。なお第1巻の巻末にティムール家とモグーリスターン・ハーン家の系図2枚が付せられている。

以上を要するに、本書は、その簡潔な文体による訳文と、難解な術語等を解説したグローサリーの部分に最大の特徴があり、本書の『バーブル・ナーマ』研究に対する貢献度はきわめて高いものがあるといえるであろう。

ハイダラーバード本に基づく第3の翻訳は、ロシアのサリエによるロシア語訳である。

Бабур-наме. Записки Бабура. Ответственный редактор С. А. Азимджанова. Перевод М. Салье, Ташкент, 1958

訳者のサリエは、1948年に、ハイダラーバード本に基づいて、899—911年の部分をロシア語に訳出していた(*Бабур-намэ (1483-1530. Исторические записки)*, Перевод М. Салье, под редакцией М. Шевердина, Ташкент, 1948)が、この既発表部分にも全面的に改訂を加え、さらに残りの部分をも訳出して、『バーブル・ナーマ』の全訳として発表したのが本書である。監修者のアズィムジャーノヴァによる短い序文(стр. 5-8)につづいて、サリエによる全文のロシア語訳(11-433)が続き、その後、地名・年代・術語などを手短かに説明した注(437-480)を付し、最後に人名・地名の索引(483-512; 513-528)とバーブルの活動地域を示す地図1葉が加えられている。また本文中には、現代のウズベク人画家の筆になる12枚の挿絵が挿入されている。

本書は、監修者アズィムジャーノヴァの序文(стр. 8)によれば、もともと「科学的・文献学的な目標を追求したものではなく、広汎な読者層に向けられたものである」という。確かに、先のベヴェリッジ、アラトの訳本に比較すると、注もきわめて簡略で、学術書というより、一般向けという印象が強い。

例えば、問題の ‘Rescue Passage’ についてのサリエの取扱い方を見ると、908年の記事を、「私はふと、“いったいいつまでフェルガーナ地方にあてもなく留まっていなければならないのだろう。別の地方で運試しをしよう” と考えた」という訳文で終り、実際にテキストに見える「私は、ムハッラム月、フェルガーナ地方からホラーサーンをめざして出発した」という記述は、理由を述べずに、翻訳から省かれている。また、ハイダラーバード本に見える欠落部についても、ただその部分が欠落していると注の中で述べるのみで、これを補完する処置を全くとっていない。また欠落の原因についても、何も議論していない。

この意味において、本書は、読物としてはともかく、これを歴史研究の史料として利用するには、いささか不十分なものといわなければならないであろう。ただし、訳文そのものは正確で、参考になる点も多い。

ハイダラーバード本に基づく第4の出版物は、ウズベク共和国のシャムスィエフ、ミルザエフによる現代ウズベク語版である。

Заҳриддин Муҳаммад Бобир, Бобирнома, Нашрга тайёрловчилар : Порсо Шамснев, Содиқ Мирзаев. В. Зоҳидовнинг сўз боҳиси ва таҳрири билан, Тошкент, 1960

まずゾーヒドフによる「ボービルの活動とその文学的・学問的遺産について」という比較的長い論文 (S. 5-52) の後に、シャムスィエフによる「出版について」と題する短い序文 (53-56) がつづく。ゾーヒドフは、この論文の中でバーブル (ウズベク語では「ボービル」と発音する) の政治的・文学的活動を評価して、彼が単にすぐれた政治家であっただけでなく、詩人・散文作家・音楽家としても傑出し、また歴史・地理・灌漑・植物・民族についての価値ある情報の提供者、同時代の社会・文学・文化一般の分析者、重大な事件や政治・社会・文化面の指導者たちの動静についての絶えざる敘述者、民衆の隷属性の摘発者としてもすぐれていた点を高く評価している。またゾーヒドフは、この論文の中に、バーブルの多くの詩やバーブルが『バーブル・ナーマ』の中に引いた諺などを引用して、そこに見出されるバーブルの世界観をも考察している。

つづくシャムスィエフの序文では、ウズベキスタンにおけるバーブルに関する研究史を略述した後、『バーブル・ナーマ』のテキストとして、イルミンスキー本とハイダラーバード本の2種をあげ、この2本を参照して、先に1948年、1949年に *Заҳриддин Муҳаммад Бобир. Бобирнома, I-II қисм, Нашрга*

тайёрловчилар : П. Шамсиев, С. Мирзаев, Тошкент, 1948-1949 を出版したが、問題が多かったため、今回の改訂版を出す事にしたと述べている。

この序文の後に、『バーブル・ナーマ』のウズベク文字（キリル文字を改良した文字）を用いた転写テキストが続く（59-452）。この部分が本書の中核をなす部分である。ただし、このテキストは、ハイダラーバード本、イルミンスキー本のいずれか一方を底本にして作成されたものではなく、2人の編者が、両本の中から原本に近いと推定した部分を、いわば恣意的に摘出し、それらを繋ぎ合わせて作成されたものである。例えば、冒頭には、イルミンスキー本（ケール本）にのみ見え、ハイダラーバード本・エルフィンスターン本には見えない、従ってベヴェリッジ夫人、アラト、サリエが訳出しなかった「讃辞」の部分が、本文として掲げられている。しかし、この部分は、ベヴェリッジらが推定したように、おそらく本来の『バーブル・ナーマ』には含まれなかった文章である。このような問題の箇所を、『バーブル・ナーマ』の本来の文章として採用するには、当然納得できる説明が必要であろう。しかし、この書の編者たちは、その説明を全く行っていない。また編者らは、この転写テキストの随所で、ハイダラーバード本、イルミンスキー本に語句の異同が見られる場合には、いずれか一方の語句を、特に理由を付さずに、テキストとして採用し、残る一方を脚注の形で各ページの欄外に示している。これは、このような処置をとる事によって、編者がこの書に critical text 的な性格を与えようとしたものと推定される。しかし、語句の選択があまりに恣意的に行われているため、このテキストを科学的な研究成果と見なす事はできない³⁷⁾。2つのテキストから作り上げられた合成テキストであるため、その根拠とされたテキストの葉数、ページ数も注記されていない。換言すれば、この転写テキストは、テキスト決定の根拠を示すという科学的な手続きを欠いているため、『バーブル・ナーマ』の学術的研究の基盤としては利用する事ができないという事になる。

ただし、この転写テキストは、全体としては非科学的なものではあるが、部

37) ソ連のブラゴワも、編者らのこのようなテキスト編集の方法を批判して、彼らのテキストを「科学的・批判的なテキストと見なす事は不可能である」と述べている。もっとも、ブラゴワの批判は、直接には、編者らによる1948-49年出版のテキストに向けられたものである。しかし、編者らの編集の方法は、1960年版でもそのまま踏襲されているので、ブラゴワの批判は、1960年版にも当てはめる事ができる。Г. Ф. Благова, “К вопросу о подлинности текста «Бабур-наме» по Керовскому списку,” *Краткие сообщения Института Народов Азии АН СССР*, XLIX, Москва, 1961, стр. 89.

分的にはきわめて大きな利用価値を持っている。それは編者たちが現代ウズベク語を母国語としており、ソ連の言語学者たちによって現代ウズベク語との直接的な関係の故に「古ウズベク語」(староузбекский язык)とも呼ばれているチャガタイ・トルコ語を、他国語を母国語とする他の研究者たちより、より正確に理解していると思われる場合がしばしば見られる点である。

例えば、ハイダラーバード本135a ll. 10-11 に見える QWLADYLAR は、現代ウズベク語 кувламоқ「追う」の知識によって、кувладилар「(彼らは) 追った」と正確に転写され (S. 193), 同じく 155b l. 5 の ҲҮЛ ҚҮЛДҮЛАР も現代ウズベク語 ҳаялламоқ~ҳаёлламоқ「ぐずぐずする、逡巡する」の知識に基づいて ҳаял қилдилар「逡巡した」と転写され (S. 213), 194b l. 7 の АҮНКЎҲҮБ も энгашмоқ「身をかがめる」に基づいて энгашиб「身をかがめて」と転写されている (S. 257)。このような例は他にも見られ、それらは『バーブル・ナーマ』の文章を正確に理解するために大いに参考になる。また、ハイダラーバード本などの写本の文字が不鮮明で、それをどう読むべきか決定しかねる場合にも、このウズベク本の読み方が参考になる場合も多い。このように本書の転写テキストは短所と長所を併せ持つが、その長所にはきわめて大きな利用価値があるといえるであろう。

なお、チャガタイ・トルコ語(古ウズベク語)と現代ウズベク語とはかなり近い関係にあるため、現代のウズベク人たちは、この「古ウズベク語」の転写テキストをほとんどそのままて読解する事が可能なはずである。その意味からすれば、このウズベク文字による転写テキストを『バーブル・ナーマ』の現代ウズベク語への翻訳と見なす事も可能であり、事実、フランスのバケグラモン³⁸⁾の仏訳にもこの書はウズベク語訳('trad. en uzbek')として記載されている。筆者も先に本紀要に発表した「フェルガーナ章」「カーブル章」の邦訳の凡例の中で、この書を「現代ウズベク語訳」と呼んだが、これは上述の如き理由に基づくものである。

この転写テキストの後に、「付録」(s. 453-461)としてイルミンスキー本の'Fragment'の部分(pp. 494-506)の転写テキストが続く。そしてその後、「翻訳」として、本訳書の361-363ページ、383-385ページ、387-395ページに

38) J.-L. Bacqué Grammont (tr.), *Le livre de Babur. Mémoires de Zahiruddin Muhammad Babur de 1494 à 1529*, Paris, 1980, p. 470.

転写テキストが見える所の、原典がチャガタイ語ではなくペルシア語で書かれている3つの部分を、現代ウズベク語に訳出している。なお、この3つの部分の内容は、ヒンドゥースターン租税一覧表（ハイダラーバード本 292a-293a）、バーブルの禁酒令（同 312b-314b）、捷報（同 316a-324b）である。

この後に、人名索引（s. 479-498）と地名索引（s. 499-512）が続き、最後に目次（s. 513）が付されている。地図や注は全く付けられていない。

以上を要するに、本書は、学術的な出版物とはいえぬが、ウズベク語を母国語とする編者たちによるテキストの読み、すなわち転写は、さすがに正鵠を得ている場合が多いため、その面では常に参照されるに値する十分な価値を持つといえるであろう。

ハイダラーバード本を利用した第5の、そして最も最近の翻訳は、フランスのバケグラモンによるフランス語訳である。

Le livre de Babur. Mémoires de Zahiruddin Muhammad Babur de 1494 à 1529, traduit du turc tchaghatay par Jean-Louis Becqué-Grammont, annoté par J.-L. Bacqué-Grammont et Mohibbul Hasan, publié avec le concours du Centre Notional des Lettres, Paris, 1980

まずフランスのトルコ学研究所長バザン Louis Bazin の短い序文(pp. 5-6)があり、次にソ連のアズィムジャーノヴァ Sabakhat Azimdzhanova による「トランスオキジアナにおけるバーブル」(pp. 7-13)、アフガニスタンのハビービー Abd-al-Hayy Habibi による「アフガニスタンにおけるバーブル」(pp. 15-24)、カシュミールのハサン Mohibbul Hasan による「インドにおけるバーブル」(pp. 25-41)という3篇の概論が掲載されている。本書がユネスコの出版物であるため、バーブルの3つの活動地域、すなわち中央アジア、アフガニスタン、インドを代表する3人の研究者たちに執筆を依頼し、本書にユネスコの活動にふさわしい国際性を備えさせようとしたものであろう。これらの3篇の記述には、特に目新しい点は認められないが、これらを通読すれば、3地域にまたがるバーブルの活動の概容を理解できるであろう。なお、ハビービーの概論には、カーブルのバーブル庭園にあるバーブルの墓石に刻まれているペルシア語の刻文と、バーブルの墓石の傍にあるフマーユーンの子ミールザー・ムハンマド・ハーキム及びバーブルの子ヒンダル、それにヒンダルの娘ルカイヤ・スルターン・ベギムのそれぞれの墓石に刻まれたペルシア語の刻文の

フランス語訳と、庭園内の大理石製の小モスクに見える刻文のフランス語訳が含まれている。またハサン執筆の部分には、バーブルのインド感と、『バーブル・ナーマ』の記述を通じてうかがわれるバーブルの人間性についての考察も見られる。

これらの概論の後に、『バーブル・ナーマ』本文のフランス語訳 (pp. 45-423) が続く。ただし、この翻訳作成のために用いられたテキストについては、ただバザンの序文に「チャガタイ語原典による」(‘d’après l’original en tchaghatay’) と記されているのみで、本書ではそれが明確に特定されていない。

しかし、訳者のバケグラモンは、先に1969年に、パリ大学に対して、

Bâbur Nâma. Mémoires de Zâhiru-ddîn Muḥammad Bâbur. Édition critique et traduction de la chronique des années 899 à 908 de l’Hégire, d’après les manuscrits Elphinstone, de Haydarâbâd et de Téhéran, précédées d’une introduction phonologique. Thèse dactylographiée présentée pour le doctorat de 3^e cycle, Université de Paris, Faculté des Lettres et Sciences Humaines, 1969

という学位請求論文(未公刊)を提出し、その中で『バーブル・ナーマ』の第1部「フェルガーナ章」の言語に関する音韻研究(133p.), critical text (348 p.), 仏訳を行っているので、本書の仏訳も、エルフィンストーン本、ハイダラーバード本、テヘラン本を主として利用して作成されたものと推定される。しかし、部分的にはイルミンスキー本も利用された事は、後述する如く(43ページ参照)、その‘Fragment’が訳出されている事から明らかである。

訳文は、全体的にはきわめて明瞭で、参考になる点も多い。ただし、時に翻訳が全く省略されている部分がある。例えば、ハイダラーバード本 190b ll. 8-10 に見え、その難解さの故にベヴェリッジ夫人も本文中には翻訳をのせず、その内容を、付録 I, “On the Weeping-willows of f. 190b” (pp. xxx-xxxii) として検討した部分は、この仏訳では、特にその旨断る事もなく、全く訳出されていない。この他、若干の単語の訳が訳文から脱落している場合もある。例えば仏訳 p. 246 ll. 25-26 ‘Chîrîm l’Oncle et ses frères aînés et cadets’の部分は、‘Chîrîm l’Oncle et Yarak l’Oncle et ses frères aînés et cadets’が正しく、また p. 239 ll. 5-6 ‘revinrent par Echkemich et Narîn, remontèrent le Qîzîl Su’ は ‘revinrent par Echkemich et Narîn, arrivant à Kilagahi,

remontèrent le Qizil Su' とすべきところである。また避け難い事ながら、明らかな誤訳も認められる。例えば仏訳 p. 207 l. 50 'Il était homme-lige' は、原文 (171b) の部族名 Nukuz を、普通名詞 nökär と誤解したもので、'Il était Nukuz' とすべきであり、p. 209 l. 31 'Il avait une noble ascendance' は原文 (173b) の 'šāhib-i uşul' の uşul の意味をとりちがえたもので、'Il avait le sens de l'ouïe excellente' とでも訳出すべきところである。また p. 237 ll. 10-11 'Ma mère et moi n'avions plus alors ni province, ni village, ni même quelques oiseaux' は、原文 (200b) の 'qosh' を 'qush' と誤解したもので、'Ma mère et moi n'avions plus alors ni province, ni village, ni même quelques paires de boeufs pour le labour' とでも訳さねばならない。

ベヴァリッジ夫人が「偽」と考えた問題の 'Rescue Passage' の部分は、本書の訳文中にその全文の仏訳を掲げているが (pp. 154-155), 後の注 (pp. 438-439) でこの部分が「真偽のほどの疑わしい」部分であると述べ、ベヴァリッジ夫人の説を追認している。

原典テキストに記事が欠如している 5 カ所の欠落部の内、914-924 年に関わる最大の欠落部については、本文中に、ミールザー・ハイダル『ターリーヒ・ラシーディー』*Ta'rikh-i Rashīdī* の関係記事の仏訳を掲げて (pp. 255-267), 読者の参考に供している。

また 932 年の記事の仏訳の末尾 (pp. 373-376) に、イルミンスキーが彼のテキストの末尾に付した 'Fragment' の中から、p. 494 l. 8-p. 499 l. 10 の部分を「カーンワの戦に関する別の物語」と題して訳出している。次に 934 年の記事の仏訳の末尾 (pp. 384-385) に同じくイルミンスキーの 'Fragment' の p. 499 l. 10-p. 500 l. 19 の部分を訳出し、ついで 935 年の記事の仏訳の末尾 (pp. 421-422) に、同じくイルミンスキーの 'Fragment' の p. 500 l. 19-p. 502 l. 6 の部分を訳出し、最後に 936 年の記事の仏訳の末尾 (pp. 423-426) に、イルミンスキーの 'Fragment' の残りの部分 (p. 502 l. 6-p. 506) を仏訳している。しかし訳者のバケグラモンが、これらの 'Fragment' をどう評価しているかについては、本書の中では全く述べていないため、彼が何故この 'Fragment' をここに訳出したかは残念ながら知る事ができない。

この訳文の後に「注」(pp. 427-468) が続く。この注では、人名、地名、年

代，術語等について簡単な説明が為されているが，一般読者のために書かれた感が深く，専門家にはそのほとんどが周知の事柄に属する。ただ，注の中に，しばしば『ターリーヒ・ラシーディー』の関係記事が引用訳出されている点は，この注の1つの特色であるといえよう。

「注」の後に，巻頭の3つの概論の著者たちが利用した参考文献が1つにまとめて掲げられている (pp. 469-472)。そして最後に，特殊な用語（例えば距離の単位である *körüh* とか *yıghach* ³⁹⁾ など）についての簡単なグローセールが続き (pp. 473-475)，その後には目次 (pp. 477-478) が付せられている。

なお，訳文中の随所に，トルキスタン，フェルガーナ，サマルカンド，北部アフガニスタン，中部アフガニスタン，中南部アフガニスタン，西北部アフガニスタン，ヘラート，北部インドに関する各1ページ大の手書きの地図が付載されており，きわめて有用である。あるいはこの地図類が，本書の最大の特色であるといえるかもしれぬ。索引は全く付せられていない。

以上を要するに，本書は，ユネスコの出版物という制約のためか，学術的な考察・議論をすべて省いた一般向けの翻訳という性格が強いように思われる。しかし，翻訳の省略など若干の欠点は認められるものの，その明快な訳文と多数の地図には参考になる点が多い。

Ⅲ Г. Ф. ブラゴワのベヴァリッジ説批判

前述の如く，ベヴァリッジ夫人の諸研究の出現とハイダラーバード写本の出版の結果，イルミンスキー本はほとんどその存在価値を失ってしまったかに見えた。しかし，ベヴァリッジ夫人によるイルミンスキー本についての否定的見解に対しては，すでに1961年に，ソ連の言語学者ブラゴワ女史によって，鋭い批判論文が発表されていた。

Г. Ф. Благова, “К вопросу о подлинности текста «Бабур-наме» по Керовскому списку,” *Краткие сообщения Института Народов Азии АН СССР*, XLIV, Москва, 1961, стр. 89-105

39) バゲグラモンは，*körüh* 及び *yıghach* を共に ‘environ 3,2 km’ と記すが，*körüh* (4000歩の距離) はともかくとして，*yıghach* は一般には約6 kmと考えられており，これを約3.2 kmとする根拠が不明である。

がそれである。しかしこの論文は、1961年に発表され、内容的にもすぐれていたにもかかわらず、ほとんど学界の注目をあびず、1972年に刊行されたストーリー『ペルシア文献誌』のロシア語版の編者も、この論文について、「十分に根拠をもつ議論に立脚しているにもかかわらず、現在までのところ、学界で反影を呼んでいない」と記している。⁴⁰⁾この論文を一読したところ、筆者にも、女史の論文は確かに「十分に根拠のある議論に立脚している」と思われる。それ故、ここに女史の論点をやや詳しく紹介して、ベヴァリッジ説の当否を改めて考察してみる事にしたい。

さて、ブラゴワ女史は、まずイルミンスキーが依拠したケール本の価値についてのベヴァリッジ夫人の否定的見解を紹介した後、夫人が、イルミンスキー本を *serious* な学術的出版物ではなく、本来、学生のための教科書として、数種の資料を混合して編集された編纂物にしかすぎないと見なした点を批判する。すなわちブラゴワは、トルコ語の歴史に関心を示した最初のトルコ学者のひとりであるイルミンスキーは、ケール本を批判的・客観的に取扱った事、そしてイルミンスキーがケール本に含まれた『バーブル・ナーマ』の真正の文章を、同じケール本に含まれるバーブル以外の者の手による ‘Fragment’ と混同して、1種の編纂物を造り上げるというような愚は全く犯していない事を主張している。そして、ベヴァリッジ夫人がこのような誤解をした原因は、夫人が、イルミンスキー本のロシア語の序文を、その正確さを欠く英訳によって利用した点にあると述べている。

ついでブラゴワは、先に (p. 10) 本稿で紹介したベヴァリッジ夫人の1908年の論文の内容を摘録した後、イルミンスキー本の pp. 2-70; 265-450, ハイダーバード本の ff. 2-56; 208-348 の部分を例にとって、以下の如く夫人の仮説——ケール本の908年までの部分はペルシア語訳本からのトルコ語への重訳にすぎないという仮説——を批判している。

I. イルミンスキーの刊本が、ケール本を忠実に再現していないというベヴァリッジ夫人を説について。

イルミンスキー本 (II と略称する) とケール本 (K と略称する) には、たしかに若干のテキストの相違が見られる。それらの相異は、次の諸点である。

40) Ч. А. Стори, *Персидская Литература. Био-библиографический обзор*, Переработал и дополнил Ю. Э. Брегель, II, Москва, 1972, стр. 832, примечание 42.

1. イルミンスキー本の明らかな誤り又は誤植。これらはさほど重要でない箇所が生じている。以下にその例を示す。

II	JWJWLWKYDH	ASR W MAL	QYLWB
K	JWJWKLWKYDH	ASYR W MAL	QYLYB

2. ケール本に、アラブ文字の *diacritic point* が付せられていないか、付せられていてもそれが誤っているとイルミンスキーが考えた場合には、イルミンスキーが正しい形を推定し、その形をイルミンスキー本に印刷している。しかし、その場合、イルミンスキーの推定が常に正しいとは限らない。このような誤りは、1. の誤りより多い。

II	BAŠ QWRĠAN	ASRWSTH	AḤSYKT	MḤNT	N'L WA DAĠY
K	TAŠ QWRĠAN	ASRWSNH	AḤSYKT	MḤNT	L'BY DAĠY
	SR DRḤTYSY	MALAT			
	MTMR DRḤTY	ḤALAT			

3. ケール本に種々の形で綴られている同一の単語は、イルミンスキー本では読者に理解し易いテキストを提供したいというイルミンスキーの欲求から、1つの綴字に統一されている。

II	AWLWĠ	BYRLH	MYNYNK
K	ALWĠ/ALĠ	BYRLH/BYLA	M??K ⁴¹⁾

4. ケール本に見える *morphological* な誤りは、イルミンスキー本では、テキストの欠陥を除きたいというイルミンスキーの欲求から、正しいと思われる形に改められている。

II	nominative の形を用いる (例略)		DYRLAR AYDY
K	dativ-directive, locative の形を用いる (例略)		DYLAR AYDY
	KYLH DWR AYRDY KYM	YAŠWRWQLYQ	完全な、非
	KYLHDWRKANDA AYRDY KYM	YAŠWRWQLY	可能・不可

41) ? は、*diacritic point* を欠く文字を示す。

省略形を用いる（例略）

能の -a を伴った省略構文を用いる（例略）

5. morphological な面でのテキストの訂正は、ケール本に見える若干の古い形の語現象の一種の近代化をまねている。

Il	locative の使用 QŞBHDA	ablative の使用及
K	locative の機能を持つ nominative の使用 QŞBH	ablative の機能を
び単一動詞形 (aorist) の使用		ANA ṬRFYDYN SLṬAN
持つ locative の使用、複合動詞形の使用		ANA ṬRFYDA SLṬAN
MADYĞA YYTAR	3 人称 possessive suffix に続く accusative	
MADYĞA YYTAR BWLWR	3 人称 possessive suffix に続く accusative	
-ni の使用 AḤTYARYNY	形容詞には lar を付さぬ	YḤŞY ČAPQWLAŞTY
-n の使用 AḤTYARYN	形容詞 + lar の使用	YḤŞYLAR ČAPQWLAŞTY

6. 語彙の面での相違は、極めて微々たるものである。ケール本の動詞 *kiri-shti* の代りに、イルミンスキーは唯一度、その同意語の *bashladı* を使用しているにすぎない。

以上が、ケール本とそれに基づいたイルミンスキーの刊本との間の見られる相違点であるが、それらは少数で、微々たるものにしかすぎないと考えられる。それ故、イルミンスキーの刊本が、ケール本のテキストを勝手に改変して作られているというベヴァリッジ夫人の説は当たっていない。この事は、同じケール本を用いて、イルミンスキー本とは全く別個に出版されたベレジン⁴²⁾のテキストとイルミンスキー本のテキストがほとんど完全に一致している事からも確認される。

Ⅱ. ケール本・イルミンスキー本とハイダラーバード本の相異点について。

1. テキストの構成に関しては、次の如き小さな相異点が指摘される。

A. ハイダラーバード本には、冒頭の讃辞を欠く。

42) И. Н. Березин, *Турецкая хрестоматия*, I, Казань, 1857. ベレジンは、その『トルコ語文選』の一部に、『バーブル・ナーマ』のテキストの一部を収録している。

B. ハイダラーバード本には、ヒンダルの誕生とヒンダルの養育のためのマーヒム・ベギムへの手渡し、子供の誕生にまつわる占いの習慣に関する記述を欠く (220a)。

C. ハイダラーバード本には、この他、比較的短いフレーズが欠けている場合が、9カ所ある (5a, 23b, 26b, 27a, 28b, 44a, 47b, 50a, 289b)。

D. ハイダラーバード本にペルシア語で記されている部分 (296b, 297a) がケール本 (イルミンスキー本) (pp. 384, 385) では古ウズベク語 (チャガタイ語) で記されている。

E. ケール本 (イルミンスキー本) (pp. 9, 28, 29, 55, 297) には、ハイダラーバード本 (7b, 22b, 23b, 44b, 231b) に見える若干のフレーズが欠けている。

F. ケール本にペルシア語テキストが挿入されている部分 (pp. 38-39) は、ハイダラーバード本 (30b-31a) では古ウズベク語 (チャガタイ語) テキストが見える。

2. 正字法

A. **genitive** の **suffix** は、ハイダラーバード本では唯一 **NYK** という書き方が用いられているが、ケール本 (イルミンスキー本) では **NYNK** という書き方が大勢を占め、時に **NYK** という書き方が現れる。⁴³⁾

B. **ulugh, tagh** といった語は、ハイダラーバード本では語尾が **Q** で現わされ、時には **Q** の上に小さな **Ġ** が書かれている。ケール本 (イルミンスキー本) では常に **Ġ** で現わされる。

C. 語頭に **F** を持つペルシア語からの借用語は、この **F** がハイダラーバード本では **B, P** で写されているのに対し、ケール本 (イルミンスキー本) では **F** が保持されている。

D. 語末の有声子音ないし鼻音の後に、ハイダラーバード本では有声子音ではじまる **directive suffix** が用いられているのに対し、ケール本 (イルミンスキー本) では、かなりしばしば、無声子音ではじまる **directive suffix** が用いられている (例: **SMRQND-QH** など)。

以上の諸例から見ると、ハイダラーバード本とケール本 (イルミンスキー

43) ハイダラーバード本では、確かに **NYK** という綴字が大勢をしめるが、これが「唯一」の綴字ではない。**NYNK** という綴字も用いられている事は、例えば 45b ll. 5, 6, 8, 9 を見よ。

本)の間にみられる正字法の相違は、写字生の相違にその原因があると考えなければならない。従ってベヴァリッジ夫人が、1908年の論文の中で、ケール本(イルミンスキー本)に *yalang* を表わすのに **YLNG** という綴字が用いられているのは、**YALANG** という「バーブルが常用した形」と相違すると述べているのは正当ではない。

3. 言語面での相異点

A. 格を示す接尾辞の相互交替の可能性に基づくもの。なお、H はハイダーバード本、Il はイルミンスキー本の略称。

a. nominative と locative の相互交替

H	shimālī jānībī	sharq tarafidur	Samarqandning janūbidur
Il	shimālī jānībī da	sharq tarafī dadur	Samarqandning janūbī dadur
	urush waqtī	ba‘dī yerlār	
	urush waqtī da	ba‘dī yerlār dā	

b. nominative と accusative の相互交替

H	oghlanları chührä qılur	tash
Il	oghlanlar ını chührä qılur	tash nı

c. genitive と nominative の相互交替

H	Mīrzā taşarrufīda	Chaghatay Khān nashīdīn
Il	Mīrzā ning taşarrufīda	Chaghatay Khān ning nashīdīn
	Samarqand ning arkīda	
	Samarqand arkīda	

d. ablative と nominative の相互交替

H	Kashmīr din ötkäch	beglār din
Il	Kashmīr ötkäch	beglār

e. dative-directive と nominative の相互交替

H	elikkā tūshti	Andijāngha barıp
Il	elik tūshti	Andijān barıp

f. genitive と accusative の相互交替 (H では, K; Il より, その例が
きわめて少い)

ア. 動作の目的を表現する場合 (「～を」)

H	Bābā Kābulinī beg-atākā qılıp	munī ishik ikhtiyārı qılıp
Il	Bābā Kābulining beg-atākā qılıp	muning ishik ikhtiyārı qılıp
	anı khazānaları dābt qılıp	
	aning tilāmāy khazānaning dābt qılıp	

イ. 限定的な語結合の場合 (「～の」)

H	Oshning angizi	Hasanning nökäri	bizning jawānghar
Il	Oshni angizi	Hasanni nökäri	bizni jawānghar
	Purshāwarnıg nawāhısıda	‘Alī-shīr Begni riqt qalbıgha	
	Peshāwarnı nawāhısıgha	‘Alī-shīr Begning riqt qalbıgha	
	Afghānlarnı yasirini		
	Afghānlarning yasirini		

g. 3人称 possessive suffix の後の accusative -n と ni の相互交替
(-n は H の方により多く見られる)

H	tarhın	jihātın	kishisin
Il	tarhını	jihātını	kishisini

h. directive と locative の平行的な出現

H	Kābulgha keldilär	Khojandqa ötkärildi	bu chapqunchıning
Il	Kābulda keldilär	Khojandta ötkärildi	bu chapqunchıning

arqası gha	kölning ichigä bardılar
arqası da	kölning ichidä bardılar

i. locative と ablative の平行的な出現

H	ölgändä	fathı da song	bu ulugh bilänning ichidin
Il	ölgändin songra	fathı din songra	bu ulugh bilänning ichidä

B. directive に代る後置詞ないし名詞の使用

H	Khoräsā gha	qışlaq maşlaḥatı gha	yurtımız gha
Il	Khorāsān sarı	qışlaq maşlaḥatı üchün	yurtunuz üstigä

C. 後置詞ないし名詞の相違

H	narı	jihatı din	ötrü	qash	ākhır	dāmana bilä ötüp
Il	beri	üchün	rüberü	ald	ayagh	dāmana tübidin ötüp

D. H における possessive suffix のより一貫した使用

H	Aq Qıchıghay degän yaylag hıda	qılıch saghdaghı nı
Il	Aq Qıchıghay degän yaylaq da	qılıch saghdaghı nı
	Andijān qoshun beglär idin	
	Andijānning qoshun beglär din	

E. 動詞に関する，時制の表現法のある種の与換性に起因すると思われるもの

H	-(u)r(例 halāk bolur lar)	-tı (chıq tı lar)	-ghan edi
Il	-(i)btur(例 halāk bolub tur)	-(i)b edi(chıqı b edi)	-(i)b edi
	(oltur ghan emäs edim)	「ねばならぬ」(salmaq keräk)	
	(olturmab edim)	-(u)r (salur biz)	

「できる」(kitär **bolur**)

-(u)r (kitär)

F. 命令法と希求法の互換性に起因するもの

H	yürügäylär	degäylär
Il	chıqsunlar	desünlär

G. 多様な表現法の互換性に基づくもの

H	der edilär
Il	derlär edi

H. 名詞としての機能をはたす -(u)r を持つ形動詞形と -maq を持つ名詞形との互換性に基づくもの

H	qurghandın chıq maqları	kishining qāblıyatı shahr bol maqqa
Il	qurghandın chıq arları	kishining qāblıyatı shahr bol urgha
	yıghıl urıgha	oq qoy ar khiyāl qıldı
	yıghıshtur maqqa	oq at maq nı khiyāl qıldı

I. converb -a および converb -(i)b の互換性に基づくもの

H	yandura bergäy	tüshürä chapıp
Il	yandur ub bergäy	tüshür üb chapıp

J. -ghanda (「～した時に」) と converb -a (「～して」) および -ghan furşatlar (「～した時」), -ghan bilä (「～すると共に」) との互換性に基づくもの

H	yawuq yet kānda	aftāb chıq qanda	ekān furşatlar
Il	yawuq yetä	aftāb chıq a	ekān dä
	atlang han bilä		
	atlang handa oq		

K. ケール本 (イルミンスキー本) で 1 人称単複の動詞人称接尾辞 (-im, -uq) を伴って表現される「私 (私たち) は～を～した」「私 (私たち) は～を～していた」という概念は、ハイダラーバード本では、かなりしばしば不

定人称受動態の形を用いて表現されている。ただし、かなり稀ではあるがこの逆の場合も存在する。

H	yibārildi	atlanıldı	sayr qilıldı	wa'da qilmaydur edi ⁴⁴⁾
Il	yibārdük	atlandım	sayr qılduk	wa'da qılılmaydur edi
	keldük			
	kelindi			

逆の場合が存在する事実は、バーブルが「原則として、その表現法を不定人称にきめていた」というベヴェリッジ夫人の見解を疑わせるものである。

L. 複合文の統辞法における相違点は、次の如くである。

a. 「～する所の」といった内容を表現する従属文は、H では形動詞形 (-ur など) が用いられるのに対し、Il では kim に導かれた従属限定文⁴⁵⁾ が用いられている。

H	Qandahārgha kelür rüdlarning bashını
Il	rüdlar bashını kim Qandahārgha bara dur
	yer sunı bilür dawlatkhwählar
	dawlatkhwählar har tarafını kim bilür edilär

b. 「～にあった所の」といった内容を表現する従属文は、H では-daghı が用いられているのに対し、Il では kim に導かれた従属限定文⁴⁶⁾ が用いられている。

H	Khalīshangning alıda rüdnıng Qandahār tarafıdagħı ölängdä
Il	rüd ölängi kim Qandahār tarafıda edi anda manzil ta'yın
	yurt ta'yın qılıp
	qılıp

44) この文章 (wa'da qilmaydur edi と wa'da qılılmaydur edi) を例として挙げる事は、この場合には不適當であると筆者には考えられる。

45) ブラゴーフは、両本の該当ページ数をあげるのみで例文を引用していないが、その説の理解を容易にするため、ここでは筆者が両本から例文を引用した。

46) 前注に同じ。

c. 「～した時に」「～した為」を表現する場合の相異

H	kim, waqt(1)da kim	chūn
Il	-ghanda	-ghan uchun

M. 語彙の面では、ベヴェリッジ夫人の説（1908年論文）が正しいとすれば、ケール本（イルミンスキー本）ではアラブ＝ペルシア語の語彙が優先的に使用されているはずである。しかし、実際には、ハイダラーバード本でアラブ＝ペルシア語の語彙が使用されている場合に、ケール本（イルミンスキー本）で古ウズベク語（チャガタイ語）が用いられている場合がある。

H	yak krūr wā chihil shesh lak wā panj hazār tanga……
Il	bir krūr wā qırq altı lak wā besh ming tanga……

yak krūr **chihil hasht lak panjāh hazār** tanga

bir krūr wā **qırq sekiz lak wā ellik ming** tanga

asb-i topchaq bā-zayn dū rā's, khanjar-i mursa' bīst wā panj qabḍa,	
topchaq at igri bilā, kamar-i shamshīr-i mursa' iki qabḍa,	
shamshīr-i kamar-i mursa' dū qabḍa……	asmā' qılıp
khanjar-i mursa' yigirmā besh qabḍa……	eshitip
sāhib-i tajrba pādishāh	murāja'at qıldı
tajrbalıq pādishāh	bardı

また、この逆の場合もある。

H	'ālī ṭāq	sarı	yaralıq boldı	berkätmək
Il	ṭāq-i 'ālī	ṭaraf	zakhmīn boldı	maḍbūt qılmaq
ülāshildi	ḥisāb bilür kishi			
qismat qilındı	ḥisāb-dān kishi			

以上の諸事実とこの論文の末尾に付せられた「付録」（イルミンスキー本と

ハイダラーバード本のテキスト相違点の対照表)に基づいて、ブラゴーフは次の如くベヴァリッジ説を批判する。

① ベヴァリッジ夫人は、ケール本(イルミンスキー本)の908年までの部分は、アブドゥル・ラヒームのペルシア語訳からのチャガタイ語への re-translation であるが、908年以降の部分は真正のテキストであるとするが、実際には、ハイダラーバード本とケール本(イルミンスキー本)の相異は、908年以前のテキストより、908年以降のテキストに、より多く、またより重要な点で見られる。

② それらの相異点を検討して見ると、ある一方の写本では、ある文法上ないし語彙上の形が常に優勢であるとは断定できない。これらの写本では、文法上の形が、互換性を持って登場している。ベヴァリッジ夫人は、‘ekānimdā’の如き形における possessive suffix (-im) の使用はバーブルの普通の表現ではないとするが、先の H. keldük, Il. kelindi の例からも知られるように、ある1つの文法上の形を、‘Babar’s style’ と断定する事はできない。

③ ベヴァリッジ夫人の、ケール本(イルミンスキー本)ではペルシア語の語彙が優勢であるとする命題も、上述の諸例から、根拠のうすいものとなった。

④ ケール本(イルミンスキー本)にもハイダラーバード本にも、さほど大きな部分を占めるものではないが、ペルシア語の挿入の部分が見られるという事実は、ケール自身、ないしケールに基づいた写本の写字生、さらにハイダラーバード本の写字生が、写本を作成する際に、彼らが使用したトルコ語テキストに欠損部や不明瞭な部分があった場合には、一様に、『バーブル・ナーマ』のペルシア語訳本の助けをかりて、それらの部分を補った事を示すものである。なお、ケール本(イルミンスキー本)とハイダラーバード本に見えるペルシア語による挿入部分が、この両本で一致していないという事実は、両本が、その写本作成のために依拠した原写本が、それぞれ別々のものであり、またそれらの原写本から別々の写字生らによって写されたものである事を示す。

⑤ ハイダラーバード本とケール本(イルミンスキー本)の不一致は、一方がオリジナルなテキストで、他方がそのペルシア語訳からの重訳であるといった性格上の不一致ではない。この不一致は、単に両写本が作成された際、その基礎として利用された原写本の作成の時代と場所がそれぞれ異っていたという事の当然の帰結にしかすぎない。

⑥ その点から考えれば、ケール本(イルミンスキー本)をも、ベヴァリッ

ジが「真正なテキスト」と見なしたハイダラーバード本と並列的に並びうる真正なテキストと見なす事ができる。

⑦ ベヴァリッジが行ったような、原テキストに最も近いと思われるテキストを選び出す事によって、『バーブル・ナーマ』の「最終テキスト」を確立しようという作業は、よい結果をもたらす事ができない。現在知られている『バーブル・ナーマ』の全ての写本・版本の各1語1語を語毎に対照するという方法を用いて、総合的なクリティカル・テキストを確立する事が、現在最も必要とされている作業である。

以上が、ブラゴワの論文の概要である。これについての筆者の見解を記せば以下の如くである。

①イルミンスキーによるケール本の取扱いについては、筆者は、ブラゴワの見解を全面的に支持する。イルミンスキーは19世紀のロシアが生んだ最高のトルコ学者のひとりであり、その厳密な科学的・客観的な研究方法は、むしろ高名なラードロフ W. W. Radloff⁴⁷⁾をも凌いでいたと考えられる。そのようなイルミンスキーが、『バーブル・ナーマ』の真正の文章と、後世のバーブル以外の者の手になる‘Fragment’を混同する可能性はきわめて少い。事実イルミンスキーは、その序文 (p. III) の中で、ベヴァリッジ夫人が問題にしたケール本 746b-809b の部分が『バーブル・ナーマ』の本文ではなく、「付録」(прибавление) であると明言している。

なおブラゴワは、ベヴァリッジ夫人が個人的にケール本を検討する機会を持たなかったと述べている (стр. 90) が、これは、すでにホフマンも指摘しているように⁴⁸⁾、明らかに誤りである。夫人が1908年と1923年の論文の中で明言しているように、ケール本は長年にわたってロンドンの India Office に借用され、夫人によって個人的に、直接に利用されていた。

②イルミンスキー本とケール本との関係については、避け難い誤りを除き、その相異点が多くはない事から考えて、イルミンスキーがケール本を忠実に再現せず、その文章を勝手に改変したとするベヴァリッジ夫人の説は妥当ではない。

47) イルミンスキーについては、А. Н. Кононов, *Биобиблиографический словарь отечественных тюркологов. Дооктябрьский период*, Москва, 1974, стр. 168-170 に小伝が見える。

48) H. F. Hofman, *Turkish Literature. A Bio-bibliographical Survey*, Section III, Part I, Vol. 2, Utrecht, 1969, p. 164

③ケール本（イルミンスキー本）とハイダラーバード本との相異については、ハイダラーバード本が、特に908年までの部分については、絶対的にすぐれているとするベヴェリッジ夫人の説には、もはや従う事ができない。またケール本（イルミンスキー本）の908年までの部分が、ペルシア語訳からの *re-translation* であるとする夫人の説にも従う事ができない。この点に関する夫人の論拠の内、最も有力と思われるケール本（イルミンスキー本）における「人物」なる単語の使用の例（前述13ページ参照）についても、ブラゴワの述べる如く、この部分については、1)ケール自身ないしケールが基づいた写本の写字生が利用したトルコ語テキストに、何らかの欠損ないし不明瞭な部分があり、2)彼らがペルシア語訳本を利用してこの欠陥部を補った、と単純に解釈する事が可能である以上、もはや有力な論拠としての価値を失ったと見なさなければならない。

④ケール本（イルミンスキー本）を、ブラゴワの述べる如く、ハイダラーバード本と並びうる真正なテキストと見なす事には異存がないが、実際に両テキストを対照しつつ第1部、第2部の日本語訳を作成した筆者の体験から述べるならば、やはりベヴェリッジ夫人が強調した如く、ハイダラーバード本の方が、ケール本（イルミンスキー本）よりも、よりすぐれている事も事実であると思われる。もっとも、このように述べるには、『バーブル・ナーマ』全文についての、まさに「1語1語」を対照した形での詳細な検討が必要であろう。しかし筆者には、いまここにそのような対照表を提示するだけの十分の時間的余裕がない。それ故、そのような作業は将来の課題として残し、ただ現段階における筆者の両テキストの取扱い方についての見解を述べるならば、翻訳の作成など、両テキストの利用に当っては、ハイダラーバード本を主とし、イルミンスキー本を従とする利用法を最も妥当なものとする。

そして、この見解を基礎に、改めて先に紹介した（本稿、「Ⅱ．ハイダラーバード本を利用した翻訳」の項参照）5種類の翻訳をふり返って見ると、その利用テキストという面では、トルコのアラトによる現代トルコ語訳が最もすぐれているといえるであろう。イルミンスキー本を全く利用していないベヴェリッジ夫人の英訳とサリエの露訳は、その意味では価値が劣る。シャムスィエフ、ミルザエフの現代ウズベク語訳は、両テキストを混淆するという非科学的方法を用いてテキストを再構している点に大きな問題がある。バケグラモンの仏

訳には、その依拠したテキスト名が明記されていない。

なお筆者は、『バーブル・ナーマ』の邦訳に当っては、ハイダラーバード本を底本として用い、その不十分な点については、イルミンスキー本を参照している。ただ、イルミンスキー本によって訳文を補ったり、固有名詞の異同等を示したりした場合には、それらの部分を〈 〉内に収め、ハイダラーバード本に基づく部分とは明確に区別できるよう配慮している。

しかし、これではなお不十分であり、ブラゴワが述べているように、利用可能な諸写本を1語1語対照して作成されたクリティカル・テキストに基づいて翻訳を行う事が最も望ましい事というまでもない。そして、そのようなクリティカル・テキストが作成されない限り、『バーブル・ナーマ』の真の科学的研究は不可能といわねばなるまい。その意味では、『バーブル・ナーマ』のクリティカル・テキスト作成をめざしての各国の研究者の国際的な協力体制の確立が、たしかに今や急務であるといえるであろう。

補注) 例えば、問題の部分について、ケール本が、ペルシア語訳本の表現とは必ずしも一致していない次のような諸点をも指摘できる。①Pの *kūhhā-yi gird wā nawhā-yi Dihket* を、Kはそのままには訳出していない。②Pの *ānchenān shode būd ke* の ‘ke’ は、Kでは *kim* となっている。③Pの *tafāwut* は、Hでは同じであるが、Kでは *ta’athīr* という別の語が用いられている。④Pの *dar ithnā-yi hamīn sayr* は、Kの *ushal waqtta* よりも、むしろHの *ushul sayr ithnāsīda* が近い。⑤Pの *goitam* は、Kの *sordum* よりも、むしろHの *dedim* が近い。